

喜○鵲○匝○林○秋○兩○岸○

愁○人○步○月○夜○三○更○

誰○家○籬○落○款○冬○老○

何○處○郊○垌○半○夏○生○

花○殘○春○雨○細○

柳○暗○暮○潮○遲○

〔浪華詩話〕

皆對偶互に輕重なく、更に奇僻の文字を用ゐずして、警拔かくの如し。他人が百工夫を凝らしても、猶得ざるを、子琴は、則ち一笑諷の間に、累々と金玉の句を吐出して、些の苦を見ざるが如きは、眞に珠を吐く鮫人管ならざるなり。されど、子琴いかでか、吟苦せざらん。詩會より歸る毎に、當夜枕上にその詩を推敲して、あるひは、天明に達して、猶已めざることを、往々ありき。これが爲に、短命を致し、いならんか、ともいふ。是詩人の詩に忠實なる所以にして、す

なはち子琴の子琴たる所なるべし。

子琴帳中に白香山集を秘めおきて、毎夜人定の後、これを読むこと、猶元美の東坡集に於けるが如し、と或人はいへり。

社友一日出游す。田中鳴門卒然と對を命じて、『田富富田』といへば、子琴聲に應じて、『野平平野野』といひぬ。人皆その機警を稱せり。平野、富田は並びに、近郊の村名なり。

才情の美、此の如くにして、出藍の譽ある子琴は、菅谷甘谷、(名は晨耀、字は子旭)兄樂郊、(名は、臧、字は、臧宗)の二家に師事せしなり。甘谷は、菅沼東郭、(名は行、字は大管)と共に、浪華における徠派の首唱者なりき。樂郊は、即ち甘谷の門に出で、篠崎三島は又

樂郊の門より出でたり。

客舎花樹歌 原二

甘谷

昔日朱門酒、如今紫陌花、不知春色別、還訝客愁加、

涼州詞

樂郊

胡天何日陳雲收、幾處屯營萬馬秋、月底琵琶多逸響、無端彈起

古涼州、(日本詩選)

社中の耆宿と推稱せられしは、烏山崧岳なりき。本業の鑿術は、香川太中に學び、經學は、伊藤東涯に受けたり。崧岳の垂葭詩鈔を刻するに當り、片山北海これに序して曰く、

學博辭嫻、翺翺藝苑、覆翼韻士、有年于茲、……余重閱之、蒼

古者色豪邁者氣其意蓋謂寧簡而大不猶賢於巧而纖乎……その推さること此の如し。且つ北海の意蓋し崧岳の族芝軒此地に先鳴たりしが、崧岳の起ちて響を嗣ぐに及び、かの五七言律絶に局促せる樊籬を脱出したらんが如し、といふなるか。茲には、その律絶を抄録す。

蕎麥麵

蕎麥會聞出信陽、不濃不淡最稱良、磨盤細細明珠碎、籬面飄飄白雪香、百轉棒頭開翠蓋、千揮刀下縮垂楊、或蒸或煮各從好、玉椀盛來勸客嘗、

美人汲井

阿那井欄立、銀瓶素纒垂、春情與春水、深淺有誰知、

田中鳴門は、江州より家を挈げて、浪華に移住し、鳴門橋畔に卜居し、因て自ら鳴門と號し、園を開きて、樹石を移植し、愛日と命けたり。家は、治鍋を業とすれど、絶えて賈人の臭氣なく、磊落にして、長者の風ありき。春水が「鳴門は、學博洽を務め、詩文も亦一種の氣格渾成せり、』といひしは、好月且なるべし。著に、子明遺稿あり。

細合斗南は、一に學半齋とも號し、學業は、子琴と同じく甘谷に授かり、書法は、石清水の流を汲みて、遂に一家を成せり。斗南多く、本朝前修の集を閱し、一々疵瑕を指摘して、これを譏することをお

めり。その甘谷に従ひしや、詩文を改竄せられしを、斗南執拗にして、毎々これを辯せしかば、甘谷そが人と爲りを惡みて、終に絶てり。斗南常に自家の集を檢閲し、改竄殆んど原稿を留めず。詩を小草といひ、文を遠志といふ。

河野恕齋は、京儒岡白駒の男なり。蓮池藩に仕へて、大阪邸の吏となり、吏績甚多く、暇あれば、輒ち書を著し、博學麗藻、一時推して、繡虎となせり。家集を享帚集といふ。天性豪宕にして、小節に拘々せず。客を好み、常に留酌して、詩を賦す。乃ち野史詠は、當時諸家の作を編せるものにして、天明丙午の春、晉之唯が殘片斷簡を拾收して、刊行したるなり。作家は、恕齋、鳴門、魯庵、三島、

蝨庵、白洲、巽齋、春水、北海、錢塘、菜軒、養快の十二人、詩は、七律一百二十一首なり。當時の狀況は、春水の文に曲盡したれば、遺稿より鈔録す。

書詠史詩後

余○在○浪○華○、文○墨○之○交○、不○乏○其○人○、詩○社○號○混○沌○、片○山○孝○秩○猷○、号○北○海○先○生○、衆○推○爲○盟○主○、北○海○常○誦○其○師○字○士○新○言○、曰○遊○必○可○文○、遊○而○不○文○、不○如○無○遊○、故○其○相○會○集○、輒○必○賦○詩○、其○詩○、晴○雨○寒○暄○人○事○、曲○折○寫○實○爲○主○、又○必○力○腹○稿○、是○爲○北○海○家○法○、是○時○、北○海○齒○未○滿○五○十○、田○子○明○章○、合○麗○王○離○、兩○人○齒○亦○與○北○海○伯○仲○、木○世○肅○孔○恭○、篠○安○道○應○道○、岡○公○翼○元○鳳○、左○子○岳○鳳○、葛○子○琴○張○、未○滿○四○十○、岡○君○章○豹○次○

之、其餘數人、余尤少、年僅二十餘歲、河伯潛子龍鍋島邸吏也、自京移住、固爲劇職、而愛客、暇輒呼招我社、一日謂客、曰會集有詩久矣、請詠史如何、僉曰可、子琴獨言、僕於國史、不辨菽麥、惟知七物之爲辨慶、捕熊之爲公時、而楠之爲楠、足利之爲足利、惜乎无知也、會集之詩、陳陳相依、何不可之有、余亦曰善、如子琴之言也、伯潛曰、詳於西土、而略於本朝、人人皆是、周爰諮諏、得其要領而已、何必苦思角伎之爲、乃分題各賦、其得一題、互相問應、粗得其本末、而後始命意、子琴仍談笑戲謔、腹稿已成、援毫揮洒、必使人驚嘆、是時、大日本史未傳播人間、觀者極罕、無所取正、隱岐子遠秀明能通野史稗官、衆皆待其來、質焉、子遠善

病、不得數會、為恨、詠史之會、一時艷稱、因傳其警句、至以其題、而稱其人、若稱公翼為西行法師、

期君行脚到西天、敗笠枯筇不住禪、朱戟曾從辭禁院、銀爐無意待公筵、踪留楊柳路傍水、望入芙蓉峰頂煙、自是吟壇推獨步、未嫌風藻向人傳、

稱伯潛為俊寬、

豪氣何論蓬戶賓、一麾西海作波臣、射工畏影徒相弔、淵客泣珠空自親、丘壑豈藏規畫地、廟堂不屬寂虛人、孤愁絕島如遺跡、魚腹應甘葬幻身、

稱子明為小松內府、

長裾昇殿主恩深、平氏芝蘭舊羽林、椿府納規偏泣杖、育山薦福遠投金、捕蛇朝下還城舞、却藥官終報國心、都輦一從梁木壞、管絃翻作鼓聲音、

稱子琴為源典廐、

一生成敗保平年、忠孝誰言叵兩全、山隰那教橋梓異、釜鬻終有豆萁煎、文公駢脅便逢害、智伯頭顱孰乞憐、遮莫功名係兇姦、千秋瓜瓞自綿綿、

自此厥後、愈出愈奇、不可枚舉、而子琴自謂、其作一時耳聞、不足為詩、是以深藏不出、一二為人所誦、每以為愧、蓋為此學者伯潛、而余與子明、贊成之、不募而得數十首、余歸藩後、書肆上梓

蓋舊友之家、偶集錄以存者耳、其書有南紀祇園尙濂序、子琴嘗慕尙老祇園、因與尙濂善、彙錄十數首請批、尙濂嘉其雅學、題其首簡而還之、是時、伯潛沒時年三十七、其後稍稍下世、今存于世者、南阿有岡君章、其在浪華、有一篠安道而已、今茲、安道七十、余寄詩云、論文舊社稱多士、屈指今時有幾人、安道云、獨有千秋善言之、他人不能言焉、以不知其境也、安道亦能知我哉、余亦老矣、回顧往昔、蓋三十餘年矣、間者、傾書篋、得詠史稿十餘紙、偶然而存、因裒背爲帖、爲紀其事、以附其末、

岡白洲は、魯庵と稱し、醫を業とせり。性物産の學を好み、庭に一小圃を作りて、藥艸を植ゑ、又詩經品物圖攷の著あり。家集を、香

橙窩集といふ。江村北海の詩を選ぶに當り、その集を見て、「古人の域に進めり、句法格調、今世には、得易き所にあらず、」と評せり。佐々木魯庵は、白洲と同じく魯庵を以て行はれ、亦同じく刀圭家たり。頼春水曰く、「魯庵學殖ありて、詩を善くし、書も亦法あり、風、丰高尚にして、凡流にあらず。」家集を、魯庵小隱集といふ。

岡田南山は、阿波侯の郵吏なりしが、詩賦書畫音樂篆刻射藝劍術を善くしき。年三十餘にして、父に従ひ、國に歸り、學職に拔擢せられたり。家集の木に上りたるは、五七言律詩を嗣子必が集録したる半閑園遺稿三卷あるのみなり。

大畠赤水は、明石侯の郵吏たり。中井竹山に師事せしが、竹山常に

その詩を稱して、『梁田、蛻巖の遺韻あり』とせり。その書、最初は、拙かりしに、後陶齋に従游せしより、俄然一變して、初に視ぶれば、別手に出づるが如くなりき。

頼春水は、十九歳の時、疾ありて、醫を尋ぬる爲、大阪に來り、遂に留りて、師友を求め、江戸堀に寓し、徒に授けて、生となせり。

陶齋北海に師事し、子琴と交尤も親しく、最も年少を以て、混沍社の盟に與れり。二弟春風春草（杏坪の別號）も來りて、社盟に參りたりき。その時、偶洛閩の書を得て、これを悦び、二洲と共に相講究したるが、天明辛丑の冬、藝藩より辟されて、儒員となりき。

春水遺稿は、歿後に、山陽の刻せしもの、在律紀事は、混沍詩社の盛

を鳴らして、尤も詳悉せり。

篠崎三島は、帷を下して、授業し、能書の名高く、徒弟日に多かりき。人となり、闊達、事を處すること、明快にして、貳せず。草彙、浪華風雅の著あり。

木村巽齋は、所謂有名なる蕪葭堂なり。博物にして、多くの古書を藏せり。著書甚だ多く、蕪葭堂前後集は、その家集なり。

小山養快は、賣藥舗の子にして、學和漢に通じ、殊に奇僻怪異の書を貯へたり。社中呼びて、妖怪といふ。その養快と音相近ければなり。家集を、榔環閣遺稿といふ。

萱野錢塘は、父考淵に嗣いで、肥後侯の守邸となり、錢塘吟稿を著

したり。

菱川秦嶺は、佐倉侯の城代たりし時、知られて、文學に聘せられたり。尤も文に長じ稱謂を論じて、正名緒言を著せり。

福石室は、醫家の子なり。幼にして穎異、長じて才名煥發せり。歿する年三十四なりき。

この他、柴山は、北海に勧められて、宋學に専心し、文辭を切劘し、二洲は、北海の門より出で、春水と洛閩の學に潛心し、精里はた混池社盟に與りて、益を得る所少からず。都て北海の勸獎提醒に因りて、大名を成すに至りしなり。

隱岐業軒には、菜軒集あり、井坂平墅には、松石遺稿あり、荒木商

山には、昭代詩紀の編あり、頼春風には、春風館詩鈔あり、頼杏坪には、春草堂詩鈔あり、西村南溟は、崧岳の門人を以て、その間に周旋し、三井棗州は、刀圭の暇、詩筵に叅はり、十時梅厓は、陶齋の門下にして、文詩書畫を能くし、資性風流蕭散にして、褐を伊勢の長島に解けり。『梅厓の詩に於ける、構思を費さず、筆を取りて立ちどころに成る』とは、菊池五山が詩眼に映じたる梅厓なり。

混沔社中にて、少年才子の目ありしは、富有明なりき。有明は、風懷落々として、三生の小杜をもて、自ら期し、十萬の腰纏、能く揚州の繁華を弄し、十里の珠簾、二分の明月、皆有明の詩料ならざるはなかりしが、不幸にも、短命なりしかば、諸同人これを傷みて、



のく哭詩を作りき。

分韵得魚

魚庵

屈指風流歲共除、壯齡奇厄更歎歎、梨園俳戲元推爾、蒿里悲歌亦奈予、三轉丹成人已去、九泉路杳夢相如、升亭後事誰能問、含淚應探董史書、

同前得虞

筠圃

追君歲月也云徂、一代風流名不孤、霜雪何邊埋玉樹、山河此日感黃墟、滑稽不但東方比、爛醉曾於北海俱、人世特餘夢中句、池塘芳草待春敷、

同前得文

梅厓

黯澹江天恍弔君、想看冀北昔空群、隨身共逝劉伶鋪、焚稿纔留杜牧文、花落臘風梅入笛、曲終郢調雪埋墳、緋袍易灑山陽淚、變態人間總白雲、

同前得元

南山

人間異事不堪論、之子忽然歸九原、書卷千秋長留字、枕禱一臥奈無言、東山游罷空風雨、北海客殘對酒尊、願社舊盟今幾在、隔詩未忍擬招魂、

同前得青

養快

憶昔遨遊北海亭、只今才子獨凋零、欲招宇宙魂何處、難那別離人不停、愁客幾回聞玉笛、暮天百里失文星、無情最憫柳楊色、

向入南柯夢裏青

この他、猶諸人の佳什ありしならんを、多くは散佚して、傳らず。

余は、纔にこれを白魚喫殘の吟箋中より拾ひ得つるなり。

その後、福石室の歿するや、同社の人、九島禪院に會し、詩を作り

て、これを用ひき。その時、春水の五言排律十六韵の中に、『橋老山

無梓、鳳飛臺有鳳』の一聯ありしが、諸友嘖々傳誦して、その人に

切實なるを稱し、遂に亡友を用ふには、五言十六韵を用ゐるを例と

せしかば、社友相戯れて、これを凶體といふに至れり。

江閣懷友分韵得尋字

崧岳

試登層閣望、浙瀝日華陰、千里玉人隔、長江碧浪深、裁書無渡

雁、託興有鳴琴、流水高山意、茫茫難復尋、

前題得埃字

栗山

江山千里勝、吟嘯一層臺、煙傍檐端結、流從欄外回、蒼波喚歲  
月、碧幃隔塵埃、爲我無聊甚、斷鴻呼侶來、

前題得漁字

鳴門

把酒臨高閣、渺茫嘆索居、故人多夢寐、滿目尚樵漁、梅傍江天  
淨、雁應臘雪疎、感懷連碧水、吟望一蓬蓬、

前題得萍字

玄道

江上寒威少、穿窓見列星、窮途驚落木、交道感浮萍、梅信祇難  
報、雁書何處聽、纔懷明月夜、携手叩柴扃、

前題得橋字

和光

高聳江頭閣、回看百里遙、水邊垂小樹、堤上駕長橋、山色晚逾赤、月光夜更昭、牕前對虛榻、寒燈坐寂寥、

前題得呼字

北海

迢○遞○懷○人○夜、高○樓○水○一○隅、虛○窓○燈○自○照、遙○渚○雁○相○呼、欸○乃○櫓○聲○過、漣○漪○月○色○孤、寧○知○剡○溪○棹、訪○戴○有○情○無、(以上詩箋)

謁徂徠先生墓 錄一

斗南

小○雨○蕭○蕭○白○日○寒、三○田○墓○樹○幾○摧○殘、孤○碑○永○托○長○松○寺、猶○作○徂○徠○山○上○看、

冬牡丹

白洲

宮○裡○名○花○不○怯○寒、紅○粧○白○雪○兩○相○歡、未○知○他○日○春○風○恨、先○使○君○王○倚○玉○欄、

自中濱還家舟中作

南溟

客○散○清○江○放○小○舟、金○波○的○灩○月○中○浮、漁○歌○一○曲○添○佳○興、直○下○秋○風○十○里○流、

贈某故人

赤水

彼○美○清○江○上、一○朝○賦○卜○居、芙○蓉○秋○水○佩、鴻○雁○暮○雲○書、蘆○月○鳴○榔○一○後、蘋○風○垂○釣○初、漁○蓑○堪○避○世、幽○意○近○何○如、(以上日本詩選)

八月十六夜、小齋對月、憶社中舊侶、數其人、則北海盟主、及葛子琴田子明岡公翼佐子岳河子龍萱君譽西孟清小山伯鳳

皆已歿矣、賴千秋岡君章各歸其鄉、不勝感愴、詩以寫懷、

二首

松石

問庭、嘯月步多時、獨寫秋懷欲寄誰、夜久園林繁白露、芭蕉難認、

昨題詩、

秋艸寒蛩白露辰、交遊懷舊益傷神、當年盛宴高樓月、還照空齋、

獨坐人、(松石遺稿)

巽齋

酬葛子琴

看爾三杯渴自消、今年負債幾錢料、自茲豪膽何唯酒、八斗天才

龍耐彫、(混沌社稿)

錢塘

坂田公時

何處仙姑育怪童、傳言驍勇萬夫雄、赤龍曾降高陂上、紫氣常浮

幽谷中、美土在斯逢善賈、明時相得事賢公、一朝逃去難蹤跡、

足柄山頭斂彩虹、

源範賴

榮軒

白羽堂堂如月明、關東精銳屬君營、崖山濛雨窮猿叫、海島殷雷

慘日傾、一个忠貞何所業、百篇盟誓奈高名、堪嗟廟算能持重、

人謂蒲郎不識兵、(以上野史詠)

燒蛤

三島

墨江文蛤勝罔姬、盪鼓天然調味殊、欲擬高僧燒木佛、非求老蚌

悽然何用學、菁蘇、（浪華詩話）

三博士（栗山のは得るに任せて載せられた）及び春風杏坪の二家の作は、混沌社時代に於て、採るべきにあらず、その採るべき時代は、別にあるべし、とて故らに省さつ。

混沌詩社の創始より、三十八年にして、片山北海下世せしかば、彬彬たる才子の猶存在しながら、盟主を失うて、漸く廢るに至りき。されど、その流に與りしもの、濫巾窃吹も亦多かりしかば、往々に社名を掲げて、後生を凌侮し、識者の爲に、梁山泊の殘黨など、目せらるゝに至れり。是さへ年を逐うて、凋零し、浪華の騷壇は、あはれ布穀の啼くに任せんとしたり。

北海の歿せし翌年、即ち寛政十年に、菊池五山が此地に客遊して、雲臺叟の詩社に於て、左の二人を發見したり。

春江送別

馬國瑞

煙波渺渺柳依依、望斷春帆帶雨歸、啼鳥一聲殘酒醒、江亭只有杏花飛、

雨夜聞雁

山行謹

淒涼夜雨已傷情、半夜孤燈夢未成、不分數聲天外雁、又來成陣掠愁城、（五山堂詩話）

固よりその氣魄は、前代の名家に及ばざれど、能く清新の格調を唱出して、江湖の一派に和したるこそ、享保の餘裔に異る所なりしか。

その後、十餘年、兼康氏(百濟)名は元愷、字は孟美(は、篠崎三島の門に出で、帷を下して、教授せり。浪華詩話は、即ち百濟の手に成りしなり。その詩、誦すべきものあり。

茶 梅

叢綠葉間紅斬新、綻來日月玉將勻、梅前菊後殊清絶、占斷園林十月春、

百濟は、かの王學を以て、自ら許したる大盪中齋(名は後素、字は子起)とも、相交り、彼が詞章を喜ばざりしかど、時に唱和をもなし。百濟が雪中に洗心洞を訪ひしとき、中齋詩ありき。

庭有凌雲一古松、朝來老幹雪華封、狂生心樂無人會、高捲簾帷

呪白龍、(浪華詩話)

阪上南宮(名は隆、字は大禮)は、此地の聞人なりき。奇才逸氣ありて、文事を耽悦せり。文化の末年、江戸に客游し、諸名流に周旋し、菊池五山最も款曲なりき。五山嘗て南宮の詩を評じて『唐宋に局せずして、七律は、尙明七子の氣魄あり、』といへり。

歸家作

身在東都只憶歸、己歸魂夢向東飛、醉吟何記客中句、緜篋酒痕渾在衣、(五山堂詩話)

白木半山(名は彰、字は有章)讚岐より來りて、浪華に寓し、儒を以て聞けたりしが、後東に下りて、僧となり、名を道契と改めたり。

殆んど、賈浪仙の流亞なり。その半山集、既に刊行せり。

春 雨

好雨一犁春欲融、村村農事稍匆匆、莎蕪窮笠人如畫、總在霏微  
黯澹中、

混沌社の廢してより、詩壇は、所謂梁山泊の殘黨、又は眇々の徒に歸  
したりしが、文政天保以後は、遂に篠家一門の專有なりと謂はんも、  
誤りなかるべし。混沌詩社の一名家として、豪爽をもて聞ゆたる篠  
崎三島が梅花社を創めて、歿後これを繼承したるは、義子小竹(名は  
弼、字は承弼、別號は畏堂)なりき。小竹夙に穎才の譽ありて、三  
島に愛せられ、醫人加藤吉翁の第二子をもて、出で、篠家を嗣ぎた

り。家學なる讓園の派を措きて、古賀精里に江戸に從游し、洛閩の  
學を修め、業成りて歸る後、大に家聲を揚げ、晩年には、書著す  
者、必ず小竹の序跋を請ひ、詩文を作る者、必ず小竹の批評を需め  
て、後開版して、世に銜ひつるに至れり。小竹文詩を作るに、甚だ  
刻苦せずして「文は、意を達するのみ、詩は志をいふのみ、何ぞ巧  
を弄することをなさん」といひき。されば、齋藤拙堂は「小竹の詩  
文は、天才秀拔にして、語自ら妙靈なり、一篇出づる毎に、人争う  
て傳誦す」と評したり。「小竹學なく、才なく、識なし」とは、森田  
節齋の悪口とこそいふべけれ。

篠門實に彬々たる才子多かりき。義子竹陰、佳婿松陰。門人には、奥

野小山、橋本香坡、安藤秋里、金本摩齋、山中靜逸等あり。皆詩文  
両ながら秀でたり。(此條は、「みをつくし」を參看すべし)  
小竹齋詩鈔五冊は、小竹及び竹陰の歿後、香坡、靜逸、及び内村鑑  
香(名は篤棊、字は子輔)等が、松陰に謀りて、上梓せしなり。  
茲に小竹が小詩を抄録して、風調を示す。

題信玄指麾扇

指麾如法役精兵、不忝新羅烈祖名、當日峽中無壘壁、素統一握  
是長城、

舟發浪華

秋晴無恙一帆風、風景如馳指顧中、武庫遙臨兵庫驛、青山別聳

甲山東

天保九年、江戸の三上靜一、天保三十六家絶句を編して、上梓せり。  
浪華の名家にして、靜一の採録せしは、小竹、松陰、鸞江(齋藤象、  
字は世教、阿波の人)絹州(阿部温、字は玉倩、別號は良山、讃岐の  
人)大麓(松浦鴻、字は鴻遠、別號は清癡客、阿波の人)の五家なり。  
絹州、大麓は、他に技能ある人、鸞江は、文人にして、詩は、その  
所長にあらず。この故に、その作は、省略しつ。

嘉永元年、江戸浪華の書賈相謀りて、嘉永二十五家絶句を編して、  
梨棗に付したり。此編中には、小竹、松陰、小山、旭莊、香坡の五  
家を收め、安政四年の上木なる安政三十二家絶句には、小山、秋里



旭莊、訥堂の四家を收め、文久三年に刻したる文久二十六家絶句には、雙石（落合廣、字は子載、日向の人）松陰、旭莊、秋村（柴幸、字は綠野、阿波の人）の四家を編したり。以上の絶句鈔が果して、能く當代の大家名家を網羅せしか、將能く作者を精選し得たるかは、苟も詞場に馳逐するもの、知悉する所なり。一言以て、これを蔽はんか。唯評判の高きに眩惑せられて、詩の玉も燕石も兼收せる嫌ひなからずやは。此弊殊に天保絶句に在りと知るべし。故にこの編に入りたるもの、豈に盡く詩に於ける名家大家ならん（文政以降の絶句選鈔と題して、余は別に此條の論述を試み、雜誌ふた葉に連載せり、）

左に、數家の什を採録す。

外嶺歸路遇雨

松陰

鷺地雲來失夕陽、村南村北雨茫茫、  
 橋窓難防春衫濕、剩惹梅花一路香、

春日雜詠

小山

野雉一聲春暈開、酒帘閃動映殘梅、  
 陽坡草茁平如織、何處玉孫調馬來、  
 （以上嘉永絶句）

寢語里

秋里

額垣茅屋舊比隣、紡績聲中笑語親、  
 國界涓涓三尺水、浙人燈火照閩人、

寄西叔襄

訥堂

荏○土○分○携○卅○歲○前○、鏡○中○形○影○自○相○憐○、不○知○雙○鬢○孰○先○白○、夢○裏○每○逢○  
仍○少○年○、(以上安政絕句)

秋思

雙石

西○樓○風○度○雁○聲○長○、枕○簟○無○端○生○夜○涼○、應○有○憑○欄○人○掩○淚○、鴛○鴦○瓦○冷○  
月○如○霜○、

酒醒

秋村

酒○醒○蕭○齋○夜○正○分○、閒○愁○底○事○又○紛○紛○、翠○禽○鳴○落○半○輪○月○、夢○與○梅○花○  
淡○似○雲○、(以上文久絕句)

嘉永二年の春、書賈北尾墨香が編輯して、浪華四時雜詞を發刊した

り。藤澤咳東(浪華墓誌参照)これに序して、

是○編○所○輯○、皆○係○浪○華○風○土○者○、或○懷○古○、或○賞○景○、于○山○于○川○、于○花○  
于○月○、紛○紜○錯○出○、不○立○部○類○、命○曰○浪○華○雜○詩○、當○矣○、夫○浪○華○海○内○  
貿○易○之○府○、其○名○勝○得○騷○人○之○詠○、猶○商○家○致○萬○貨○也○、實○昇○平○一○大○觀○  
矣○、而○負○有○多○、有○不○多○、以○此○判○勝○之○優○劣○乎○、物○有○良○、有○不○良○、  
是○亦○不○可○不○較○也○、孰○多○、孰○不○多○、孰○良○、孰○不○良○、委○之○覽○者○、

といひたるに因りて、書中の消息は、傳へらるべし。その作者十八  
家、詩一百八十四首を収めたり。左に作者を列舉せん。

並河 寒泉 (名朋來、字享先、別號樺翁)

中井 桐園 (名及泉、字公混)

- 廣瀬 旭莊 (名謙、字吉甫、別號梅墩)
- 奥野 小山 (名純、字温夫、別號寸碧樓)
- 香川 琴橋 (名徹、字公琴)
- 橋本 晚翠 (名惟孝、字子友)
- 大熊 龜陰 (名寅、字伯虎)
- 鈴木 茶溪 (名尚、字子德)
- 春田 壺處 (名厚生、字和仲)
- 後藤 松陰 (名機、字世張、別號春草)
- 篠崎 竹陰 (名樂、字公樂、別號訥堂)
- 橋本 香坡 (名通、字大路、別號靜庵)

- 劉 冷窓 (名昇、字君平)
- 蒔田 雲處 (名亮、字公弼)
- 竹鼻 纜山 (名則、字士倣)
- 清水 中洲 (名原、字士進)
- 早野 思齋 (名良輔、字士序)
- 篠崎 小竹 (前出)

此中、小山、松陰、竹陰、小竹の四家の作は、既に小詩を採録して一斑を示したり。その他の作家にして、詩史に存すべきは。旭莊、晚翠、龜陰、茶溪、香坡、冷窓の六家とす。以上の十家は、嘉永年代の浪華騷壇を代表するに足れり。特に旭莊の如きは、才思盈涌し

て、海潮の如く、一たび筆を下せば、千言立ち、こゝろに成り、雄渾  
妍麗、具備せざるは無し。實に一代の名家なり。浪華の詩學は、小  
竹以後に於て、旭莊の爲に、奮興せられたること、夥しいといひつべ  
し。旭莊は豊後日田の人にして、淡窓の弟なり。その著、梅墩詩鈔  
三四篇は、多く浪華城中唱酬の什たり。これを校したる門人柴秋村  
も、一作家たり。

桐園は、竹山の孫、寒泉も同じく外孫たり。中洲は、履軒の門人、  
思齋は、竹山の門下なる仰齋の男、冷窓は、旭莊の門人にして、石  
秋の男なり。冷窓も亦作家にして、師父を辱めず。

正月十日蛭子神祭

旭莊

求福何須懇禱深、  
儻然唯合絕貪心、  
生平不解世人算、  
擲我眞金買假金。

道頓堀

晚翠

卜筮君平凶與吉、  
衣冠優孟假欺眞、  
和風嫩日江頭晚、  
汗雨袖雲人弄春。

浪華竹枝 原九

龜陰

淡月凝粧立水濱、  
納錢終夜未盈縉、  
無情萬縷千絲柳、  
不繫行人空送春。

堂島

茶溪

覆雨翻雲轉瞬中、  
世情走利疾於風、  
昨聞子貢乘高蓋、  
今見簞瓢

回也空

北里

香坡

樓外月明樓內雨、粉紅狼藉泣芙蓉、心如夜半天方曉、恨殺寒山寺裏鐘、

天滿菜市

冷窓

市聲清曉集沙灣、閑肆青芹紫芋間、吾輩一生難喫了、一根隨處積成山、

旭莊の雄篇大作を載せんとせしかど、これを浪華詞壇に論せずとも、天下の詞壇、既ふ公論のあるれば、小史の分として、割愛しつ。安政三年に開雕したる浪華擲芳譜には、當時名家の書畫の浪華名勝

に關せるものを採れり。小竹、松陰、旭莊、雙石、秋里、東咳、小山、晚翠、摩齋、阪上九山、藪鶴堂、吳北渚、五十川金雪等あり。就中、一個の摩齋を表出せん。

棋

摩齋

忍則無功貪則亡、一枰即是戰爭場、請看黑子七十二、能使素車降道傍、

是等の人々と時を同じうしたる田中華城は、東咳に従遊して、儒醫と稱せられたり。その子金峯夙慧にして、神童の目あり。大阪繁昌詩三卷を著して、本地の風俗を寫したるは、實に十五六歳の時なり

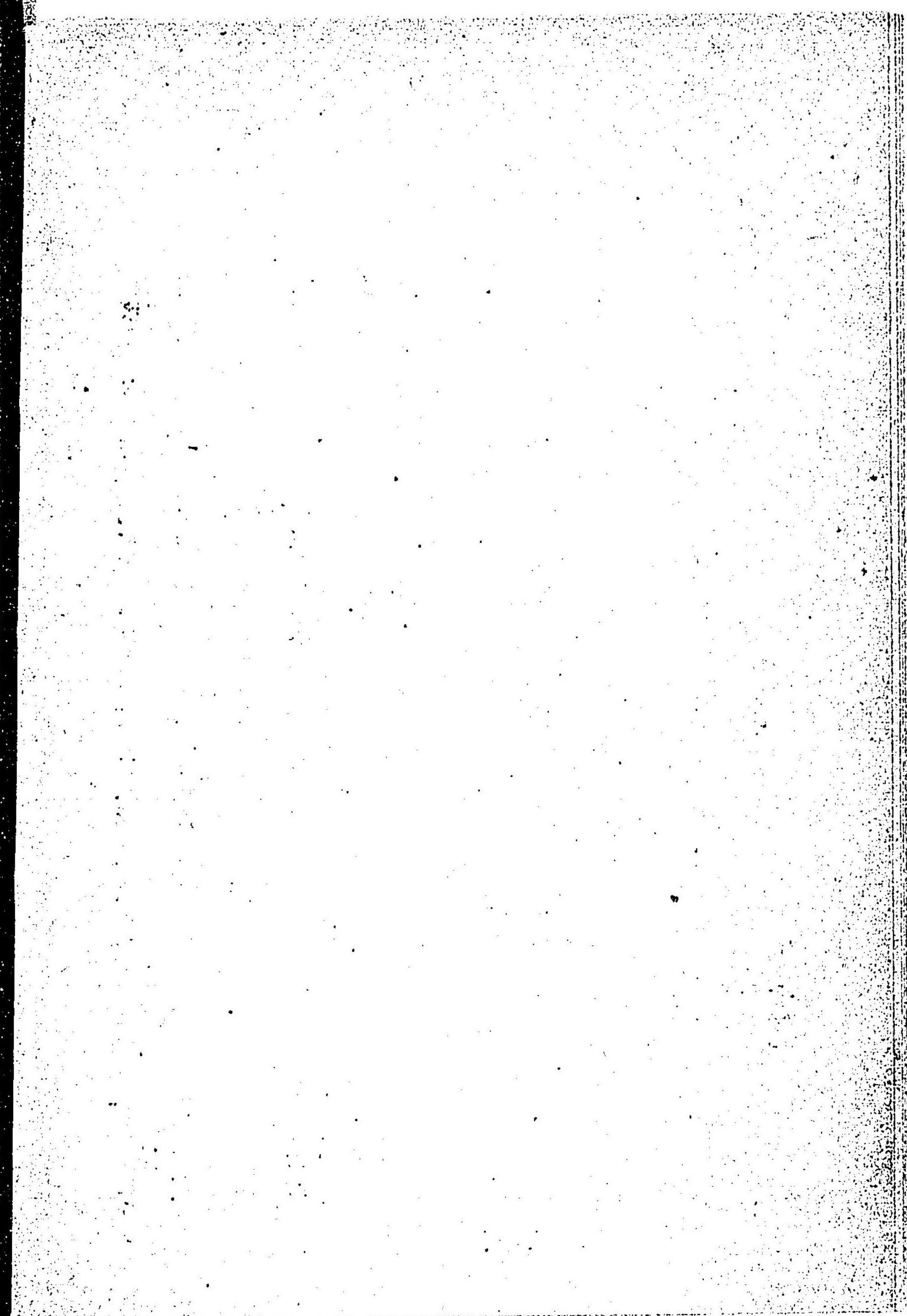
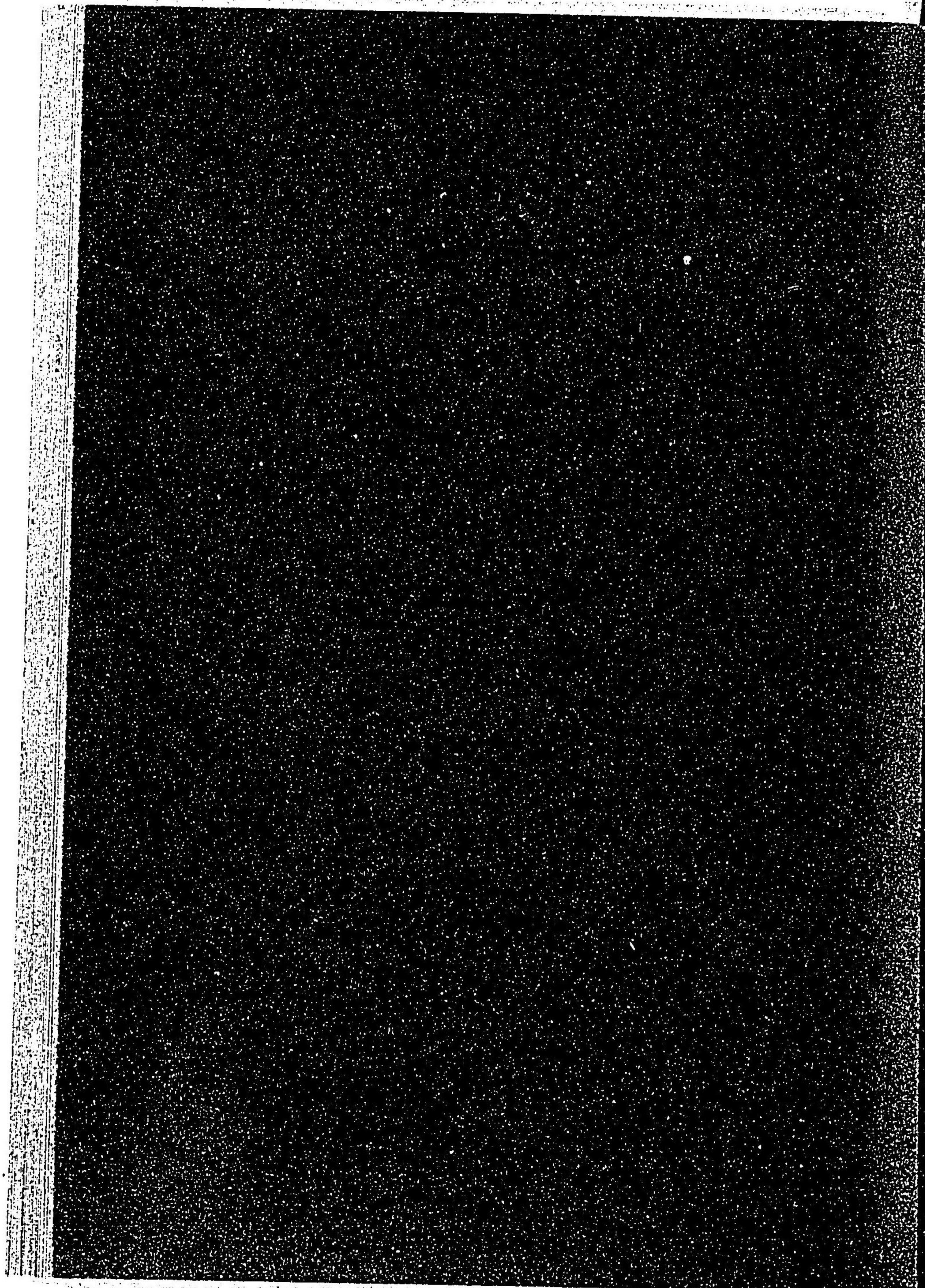
き。

この地、王博士が文學を輸致せしより、此に至るまで、凡そ一千六百年、就中、詩界の現象を録したること、僅かに、享保以後の一百三十四年間ののみありき。これを稱して、徳川時代に於ける浪華の詩學といはんも、不可なきが如し。而して、明治の維新は、この詩界においても、一大劃斷をなしたるが故に、余は姑く筆をこゝに擱きて、更に明治年代の浪華詩史を著さん人を待つになん。

附言

余の此稿は、明治二十五六年の交、浪華文學會に於て、往時の浪華文學を研究せし時に成りし舊作なり。その後、これに資すべき書は、見る隨ひて、求めおき、問わ

れば、處々これに改竄を加へつれど、猶いまだ疎雑を免れず。頃日、生成舎主人に請はれて、上梓するにつき、舊題の浪華詩史稿といふを改めて、浪華詩壇小史といふ。いさゝか舊觀を更めつる實を表するなり。大方の博雅、余が不逮を教へたまはば、幸甚きらん。明治三十二年十一月十四日の夜浪華此花町の寓樓において秋渚生識す。



# 浪華墓誌

はーおき

かくれたる墓跡の、曇々さして、世にあらはれぬるは、その苔の下に、眠れる人の慕はしきこゝそのなしたる事業の崇ぶべきとによれり、さかんに覺ゆめる。吾が難波は、そのかみ文學の名士に富み



たりしかば、それが墳墓隨ひて多く、この寺院、かくこの名所に、残れるもの、幾ばくなるを知らず。さるからに、此土に住ひぬる文學者の、これを探りて、その隠れたるを、顯すことの道なるべきを、その人。むかしはありて、今はなきが、うらみかりける。吾等膽薄えて、知らず

顔に、打おきおたえ、暇のをりく、墳墓を探ることを、樂めり。いまそのありし事どもを集めて、浪華墓誌と題し、つぎく、に掲げなん。むかし曲亭のおきなこの地に遊び來て、名だゝる墓跡を弔ひて、これを、好きもの三つの中に數へられき。されば、われ等の企は、そのよ

四  
き墓跡を、世に顯して、見ぬ世の人の面  
影うたふよすむにもとてなりけり。

辛卯の春

好 尚  
秋 渚

附 言

一 浪華の墓跡は、その名ありて、その實なきもの、いと多し。この故に、吾等書にも就き、人にも質して、一々實地の探討をさしはめたりしが、僅かに、本書の載せたるに過ぎず。吾等の寡聞をいかにせん、諸ふ、博雅の君子、吾等の短を補ふに、吝ならざらんことを。

一 編纂のはじめ、一々門部を分たんとは思ひつれど、多くもあらぬ墓目に、却て、煩しからんかと、後に思ひかへて、斯く、一つらに、年代もて分

二  
つことゝはなしつ。

一文士ならぬ雑流の人たりとも、苟も一技一能ありしものは、皆載せたり。

一本書の題號に冠するに、浪華をもてすれど、近郊のは、皆のせたり。

一墓目の下に、小傳を載せたるもあり。逸事を載せたるもあり。事蹟の汎く知られたればとて、省けるもあり。固より定まれる例なし。

### 又附言

一本書もと浪華墓跡考と題したるが、こたひ更

めて、すりまきにするにつき、いたく訂正を加へ、さらに、予が舊著なる浪華墓跡考續篇、閑伽のしづく、探墓の記などをも、書き添へて、浪華墓誌とは、あらためつるなり。最初、友人好尚と合著なりしかば、署名は、猶舊よ依る。

明治三十二年十月十五日の夜雨窓にて

秋潜生しるす

# 浪華墓誌

## 家隆卿墳 (嘉禎)

天王寺てんわうじの北なる勝曼院しょうまんいん(愛染堂あいせんだう)の後手うしろてに在り。この地を、夕日ゆふひが岡おかと稱しやうせるは、卿きやうがこゝにて、病限やまひかぎりになりける最後の歌うた七首しちしゆの中に契あきせりあればなにはの里さとにやどり來きて

なみのいり日を拜まがみつるかな

と詠よみしに、ちなみて、後人こうじんのいひならはしたるにやあらんおちうらせうら塚上つかのうへに、舊ふる榎えんの松まつといふがあり、と一書しよに見みゆれど、今は唯ただ枯根ここんを存ぞんせるのみ。その下もとに、大碑たいひあり。幅はば三尺さんせきばかり、高さ六尺ろくせきにおまれり。

いたく苦むして、弔ふ人もあさがあはれさ。是は、卿の薨せし嘉禎三年四月九日を距ること、凡そ四百餘歳の後、享保六年九月、安井の門主大僧正道恕が碑文を撰書し、四十二世秋野坊（天王寺の内なる）法印盛順が建立せしなり。碑文は、攝津名所圖繪に悉しく見ゆれば、こゝには、省さつ。側に夕陽庵あり。是れ、卿の舊棲の址なれといひ傳へたり。

本多 忠朝墓 (元和)

城南一心寺にあり。石塔いと嚴かに立ちて、そいろに、當年の雄風を想像せしむ。曲亭の騎旅漫録に、外は、板にて構ひて、猥に人を入れざるよし書けれど、今は、塀を築きめぐらして、入口よりは、

參詣自在なれば、香火絶ゆる。出雲守忠朝は、忠勝の二男なり。元和元年五月七日、大阪陣に従者二十餘人と、天王寺口に向ひて、戦死しき。年三十四。法諡を、三光院殿岸譽良玄居士といへり。

石井宇右衛門墓 (延寶)

谷町寺町の大仙寺にあり。表に、歸眞、性海以得居士、靈位と刻して、延寶元癸丑年十月十八日の十一字を、こりがさにせり。側面には、郷貫及び通稱を彫り。石井は、丹波篠山の城主青山宗俊の家士なりき。主が大阪城代となるに及びて、石井も陪從せり。當時、赤堀源五右衛門といふ者、槍法を善くし、徒を聚めて、教授しけるが、石井は、これと友垣を結びて、親しかりしに、たまく、人に

向ひて、石井の技は、また十分ならず、どの一言の唇を漏れしを、  
遺恨におもはれて、竟に赤堀に暗殺せられき。是なん、世にいふ龜  
山復讐の原因なりける。

夕霧墓 (延寶)

下寺町の淨國寺本堂東北手南回りにありて、正面には、花岳芳春信  
女とるり、右側には、再建の由をしるし、左側には、鬼貫が「この  
墓は柳なくともあはれなり」の句をるり、その下に、夕霧墓と記し  
、裏に、「延寶六戊午正月六日俗名あふさや夕霧」とあり。その  
他、臺石に至るまで、鐫字には、悉皆朱を加へたり。新町廓九軒の  
吉田屋より、鎮へに追善いとなむよし、寺僧は語れり。吉田屋には、

今も夕霧が着慣れし裯襦と「伊の、きりく」の手簡とを藏せり。著  
作堂一夕話に記せるは、再建以前の墓なれば、今のは、大に換れり

椀久墓 (延寶)

八丁目寺町の寶相寺本堂南横手松樹の下にありて、西向きなり。石  
極めて粗末にして、表に、宗達居士墓とるり、別に石を建て、椀久  
之墓、と標示せり。これが追善を營むは、天満の古衣舗川島佐祐と  
いふ人にして、孟蘭盆會ごとに、心ばかりの手向するよし、寺僧は  
かたりき。騎旅漫録に、

元日金歳越といふ義太夫本に、椀久と、ひやうたんかしく、と  
玉屋庄七が事を混合して、作れり。又小歌につくりし椀久物狂ひ

はひやうたんかしくが事なり。  
と見たり、類によりて、茲に採録す。

### 西山宗因墓 (天和)

宗因は、もと肥後加藤家の臣下なりき。西山氏、名は豊一、通稱を二郎作といふ。俳號多し。梅翁、梅花翁、野梅翁、西翁、一幽子、忘吾齋、向榮庵、有芳庵等の號あり。はじめ連歌を昌琢にまなび、俳諧は、荒木田守武の風を慕ひ、又紹純の門に入り、一家の格調を創始せり。松江維舟と交り深かりき。著述の俳書に、二十日草、四人法師、十會集、たうがらし百韻、両吟集、獨吟集、ひるかみ、等あり。天和二年、壬戌三月二十八日に歿して年七十八なりき。遺骸

をば、江戸谷中日暮里の養福寺に葬れり。浪華にては、貞享二年(四年を闕いて)嗣子宗春。一家累代の墓碑を、天満寺町西福寺に建て、正面の中央に、翁の法名を鐫り入れたり。「實省宗因法師 觀光昌察處士」とあるぞ、是なる。高さ五尺、幅二尺にあまりたる大碑なり、今に、同寺本堂西南隅西向に存せり。宗因の配は、法印探幽の女なり。同時東に、松尾芭蕉あり、浴に池西言水ありて、一時鼎立の姿をなせり。

江戸俳談林七世一陽井谷素外、その藝祖梅翁が天満に住まひし因みによりて、石を天神社内の文庫前に建て、表に

脊のとし雨ふりける元日に

浪華津にさく夜の雨や花の春梅花

梅翁

とありて、裏には、略傳をもものしたり。

井原西鶴墓 (元祿)

西鶴の歿年は、元祿六年八月十日にして、浮世の月見すこしにけり  
する二年』の辭世に據れば、享年五十二なりしを知る。此翁の事蹟  
は、關根吟風氏の小説史稿に略傳あり。今その遺れるを拾はんには、  
その俳號に、西鵬といふがありき。著作は、俳書に、伏矢數、胴骨、  
杉もき、石車あり。草子は、史稿所載の外、もき世物語、義理物語、  
武道傳來記、諸國話、文反故、旅日記、俗つれぐ等あり、墓は八

丁目寺町の誓願寺本堂東南隅北向に存じ、正面に、『仙鶴西鶴』とし  
るし、棹石高さ二尺、横一尺あり。北條團水は、椎本才麿の門弟子  
にして、西鶴の親友たり。因て、丁山鶴平と謀りて、此石を建て自  
ら京より下りて、西鶴歿りし後、七年がほど、留りて遺宅を守れり  
とぞ。享和中、曲亭が西遊のみぎり、この墓を弔ひて、これを騎旅  
漫録に記し、明治に至り、此石が無縁塔中におしこめられたるを、  
東京の露伴子、來弔して、これを見出し、資を投じて、これを抜き  
取り、別に門近き處に安んませて、

九天の霞をもれて鶴の聲

露伴

どの一句を手向けたり。これより、文學者の詣で、香火を進むる



ものいと多し。

松尾芭蕉墓 (元祿)

芭蕉の終焉の地は、御堂前の花屋裏にして、遺骸をば、栗津の義仲寺に葬りたることは、世の知れる所ながら、その風を慕ひて、處々に碑を立て、かりの墓をつくれるあり。天王寺の西門内の北側に一基あり。二重の臺石するて、方形なり、幅二尺、高さ三尺あまり表には行書にて、芭蕉翁之墓と題表し、裏面に、銘あり。

芭蕉翁、姓松尾氏、別號桃青子、名甚質、以善俳諧風靡于天下、

元祿甲戌冬十月十二日、卒於浪華、銘曰、

於虜此叟 俳之雄兮 卮言日出 和以天倪

兵部侍郎龍邱襲 撰

臺石には、『寶歴十一年正月 上浣諸國門人等建』の十五字あり。遊行寺の傍の茶店の庭前にも、黄蘗佚山が題表せし碑あり。これに因りて、ばせを茶屋と呼ぶ。この外、翁の向碑は、到るところ、數ふるに違あらず。

契沖阿闍梨墓 (元祿)

東高津餌差町の圓珠庵にあり。是なん、契沖が飛錫をといめし地なりし。碑は、いとあらやかなる棹形の石なり。表に、圓珠庵契沖阿奢梨之墓と記せる外、何をも刻せず。別に安藤年山が撰文して建てたる碑も、茲にあり。此庵いたく頽破に及びしが、今は朝廷より、

若干の祭染料を賜はりたれば、この跡の湮滅に歸せんことは、萬あるべからず。いとめでたきことにこそ。それに引きかへて、阿闍梨が友たりし下河邊長流の墓も、このこたりにありとし聞けば、幾度も探りしに、そのかひもあらざりしこそ、いと本意なかりしか。

矢頭長助教照墓 (元祿)

上福島の淨祐寺にあり。墓石いと立派にして、二重の臺石とも、凡そ七尺あまりあり。題表は、行書にて、上に記せる如く刻めり。碑文の尾に、『寶曆十二年壬午上巳日讚州高松儒學菊池武賢撰文高松隱士河田正休建』と記せり。教照は、赤穂の浪人なり。その國變に際し、退去の後、子衛門七教兼と共に、大阪に託住居せしが、病ひ

にかゝりて、身まかりき。こは元祿十五年八月十五日、即ち復讐の前四月なりき。残されたる教兼は、遂によく父の遺志をつぎて、復讐の擧を果したり。教兼の碑も、梅田の舊墓地に存せり。是は維新の際に大阪の有志者が、人士たるものゝ義氣振作を唱道して、建立せしなり。

小西來山墓 (享保)

城南逢阪一心寺の墓地中程にあり、正面に『湛々翁之墓』右側に『享保元年丙申十月三日終』左側に『旋主一來同連中』としるせり。尙同寺境内茶所の前に、かの名高き『時雨るゝやしぐれぬ中の一心寺』の句碑あり、又『すいしさに四ッ橋を四つこたりけり』の句碑は

そのところにありしが、前年洪水の節、ながれ失せにき。來山の遺址なる今宮の十萬堂は、以前伊藤三甫といふ人、私財をなげうちてこれを守れりしが、同人が市中に引越してより、庵は、他人の手に渡り、今はたい、名のみこれり。今かの見ればかり高根の花の土人形は、來山の自記と共に、その末流なる河内八尾の某方に秘藏せられをりとか。

### 五井持軒墓 (享保)

天満寺町九品寺にあり。篆額は、「持軒五井先生之墓」と記し、撰文は、伊藤東涯の筆にして「……寛永八年辛巳二月二十二日、生于大阪……享保六年辛丑閏七月十八日歿于家……先生諱守任字加助號持

軒系出于左大臣魚名……」とあり、四書屋の加助と緯號せられて、殊に四書に精通したりしは、この人なりき。

### 紙治小春墓 (享保)

網島の大長寺の門内東側に、さゝやかなる板屋根をかまへ、その下に、一つの石佛を安置し、臺石の表に、二人の法號をるれり。法號は「釋了智、妙春信女」といふ。今は、石缺けて、了智の二字、明かならず、(石の置處、今は、また西の方に移れり、委しくは、秋渚が前年物したる『この花一枝』にしるしたれば、叅看すべし。)二人の書置は、のべがみ二枚に認めて、享保七年寅十月十四日の夜十夜回向の折から、寺内にひいて、自滅するよしをいへり、此書、今も

猶寺に藏せり。傍に鯉塚もあり。

近松門左衛門墓 (享保)

墓は、谷町寺町の法妙寺と攝州久々智村の廣濟寺との兩處にのこれり、その墓石ともに、同質同形にて、さへやかなる自然石に、『阿耨院穆矣日一具足居士、一珠院妙中日事信女』と夫妻の戒名を、二行にありつけたり。法妙寺は、近松氏代々の墓所にて、右の外に同家累代の墓石一基、本堂の裏手にあり。廣濟寺なるは、斯翁晩年よりありて、寺島の尼崎屋吉左衛門がりに退隱してありしに、尼崎屋の倅、出家して、釋號を、日照とよび、當山を建立し、翁亡くなりてのち追善營むとて、境内に墳墓をまうけたるなりとぞ。兩寺とも

過去帳に、近松夫妻の法名を載せ、朝夕の追善今もおこたらず。

歿年は、享保十九年十一月二十一日にして、享年七十二とぞ聞ゆし。

鯛屋貞柳墓碣 (享保)

新清水西飯の下に在り。こは、貞柳が二十五年忌(寶曆八年八月)に一本亭芙蓉華の礎てたるにて、墓誌は、林孝徳の文なり。また辭世の狂歌、

百あてもおなじ浮世に同じ花

月はまん圓もきはしろたへ

をゑりつけたり。貞柳は、享保十九年八月十五日に歿して、年八十一なりき。その埋葬地は、天下茶屋村に残れり、といふ人あれど、

定かならず。

平泉鬼貫墓 (元文)

攝州伊丹の墨染寺ぼくせんじにあり。本堂南側東向きに立ちて、さやかなる石なり。戒名けいみやうを仙林則翁居士せんりんねづゑんこじといふ。元文三年八月二日、七十八歳にて、身まかりぬ。鬼貫おにつらの句碑は、あまた同處にのこり、又大阪繩おおくまんとの口鶴満寺くくまんじにも、田原菊翁たはらきくゑんの建立したる「おもしろさ急きふには見ぬ薄うすかな」の句碑あり。尙ある人の説に、彼の有名なる「骸骨の上を粧まそうて花見哉」の句も、碑にして、同寺にありしよしを聞きしかど、今は見あたらず。

武田野坡墓 (元文)

碣たつは、天王寺西門内なる「芭蕉翁之墓」に隣りて、それと同質同形なり。表に「淺生翁之碣あさなをちのたつ」とありて、陰いんに銘あり。

淺生庵野坡翁者、姓武田、字彌亮、號高津野翁、覃思俳諧、吟詠性情、以元久五年正月、卒于浪華無名庵、壽七十八、銘曰、

登蕉門者 莫之與京 醉吟花月 嘘枯吹生

と見たり。

また墓は、小橋寺町寶國寺本堂南側北向き高津野々翁にあり。表に、

淺生庵壽元居士と題し、右側に、「元文五庚申星正月三日行年七十八歳卒」左側に「孝子竹田氏嫡政女、門人等建之」とありて、傍に、「蕉門十哲野坡翁墓せうもんじつてつや はかしののはら」とありたる墓標はかを立てたり。これは、くわうくわめん黃華庵

南齡なんれいのものしたるなり。

紀海音墓(寛保)

八丁目寺町寶樹寺の本堂南側南向みなみむかしに、立ちて、鯛屋累世合葬たいやゑせがわいざうの墓なり。法名ほふなみを、清潮院海音日法せいしやういんにっぽうといふ。海音は、油煙齋真柳あぶらえんさいまゆの寶弟にして、寛保二年十月四日、八十歳さいにてみまかりき。

中井發庵墓(寶曆)

右みぎと同じ寺町誓願寺本堂せいがんじほんだうの西にしにあり。碑ひの正面しょうめんには、『發庵中井先生之墓』とありて、その他には、文ぶんを刻きり。文は、白井蘭洲しらいわんしゅうの作にして、書は、三宅春樓みやけしゅんろう(萬年の男)の筆ふでになれり。發庵諱いみなは誠之、字は叔貴しゆくき、通稱つうしやうは、忠藏ちゆうざうといへり。播州龍野ばんしゅうたつのの産うぶなり。大阪おほさかに出で

て、懷德書院くわいとくしやういんを興おこし、人ひとなり。寶曆八年六月十七日ほうりき歿ぼつしき。年六十。六。中井一家の碑中、文ぶんを刻きせるは、發庵のはがりなり。

松木淡々墓(寶曆)

難波瑞龍禪寺なんばずいりゆうぜんじ(俗ぞくに鐵眼寺てつがんじといふ)の厨房くちりの南手みなてにあり。大おほなる自然石じねんせきには

高源朝水居士墓

寶曆十一年辛己冬十一月二日卒(以上面)

半時庵淡々得齡八十八(昔)

淡々たんたんの後のちは、絶たれたれど、門人舍梓もんじんしやすの文几ぶんぎをつげるもの、代々よゝありて、今猶いまなほ八千房流美はちりゆうみと稱しょうして、田蓑橋たみのばしの南みなみに住すめり。(流美も、既に

道山に歸りしかば、八千房の文几は、土居無腸子、これを繼げり。  
忌辰毎に八千房權主となりて、寺中に俳人を會し、淡々が物せし軸  
を掛けて、おのく吟詠をほしいまゝにし、その靈を慰むるよし、  
寺僧はかたれり。著者等が寺僧に請ひて、その軸を見るに、法橋梅  
軒が雪中山水の圖にして、その贊に、

雪の香をすてゝやゝ

春を知る初めかな

乘興來興盡歸

八十五叟 半時 庵

とあり。淡々が生前に、自ら墳墓の地を、こゝに定めて、親しく松

栢の二樹と二石とを移しかきつれど、今は、樹石ともに昔のものに  
あらず、と流美は、いひき。舎棹が手づから刻みし淡々が像は、八  
千房に藏せり。此寺内には、八千房代々の碑もあり。半時庵の詳傳  
は、秋渚が、先年ものして、當時の『なにはがた』に載せたり。

中島貫齋墓 (寶曆)

中寺町禪林寺本堂の西にあり。表に『貫齋中島先生之墓』と署し、  
裏に、文を刻せり。名は長盛、通稱は、太郎兵衛といふ。火技に妙  
にして、中島流の祖なり。寶曆十二年正月五日、年六十九にして、  
歿しき。

五井蘭洲墓 (寶曆)

八丁目寺町實相寺内の南手にあり。篆額は、「蘭洲五井先生之墓」とありて、その下に、文を刻せり。石いたくあれて、缺損多く、讀み難き所まゝあり。五井氏の頼み寺は、九品寺なれど、先塋の境域、狭かりしかば、こゝにはうぶりし由、文に見ゆ。歿りしは、寶曆十二年壬午三月十七日なりき。その撰文は、中井竹山、篆額并書は、履軒が筆なり。蘭洲名は純禎、字は子祥、通稱は藤九郎、持軒の男。歿せしとき、享年六十六。

左にその著作の書目を擧げん。これにて、斯翁が和漢の學に通達したりしを知るべし。

古今通 二十卷

源語話

坊間に梓行せる源語梯の原本

質疑篇 一卷

瑣語 二卷

茗語 〇

非物篇 七卷

兵論 〇

勢語通 二卷

新題百首 一卷

菅沼東郭墓 (寶曆)

西天滿寺町の寒山寺にあり。浪華に於て。徠派の學を首唱せしは、東郭甘谷とす。名は行、字は大管、江戸の人。寶曆十三年十二月二日、七十四歳にして歿しき。

菅谷甘谷墓 (寶曆)

舍利寺村の南岳山舍利寺にあり。甘谷は、學を徠に受けて、藤川



東園に傳へ、東園は、これを中山城山に傳へ、城山は、之を藤澤東  
咳に傳へて、今の南岳に至る。位牌は、表に「菅晨耀子旭甘谷老居  
士」、裏に「寶曆十四年甲申年三月二十四日卒」とあり。晨耀は名、  
子旭は字、享年は、六十九なりき。

古林正桂墓 (明和)

貫齋の墓より、東に當る處にあり。七尺ばかりなる圓柱形の大碑に  
して、正面に「見宜堂古林正桂之墓」と刻せり。古林家は、正温以  
來代々の大醫なりしが、そのおくつきの、今は用ふものもなく、一  
家の墓石、藥々として、空しく蓬生の中にうづもれ、手向の香火、  
かげだにもなきが悲しさ。文に、「明和元年臘月廿有三日卒享年七十

一」と見ゆ。無縁の石碑は、大きなるほど、一入あはれぞ、まさり  
ぬる。

兄樂郊墓 (明和)

おのれ在津紀事の爲に、をしへられて 此墓を探りき。碑陰に「明  
和乙酉五月廿三日」の九字あり。字體楷書なり。蓋亦芙蓉の筆あら  
ん。茲に紀事の一節を抄出せん。

安道子琴之師、曰兄臧、字臧宗、號樂郊、隱君子也、其學師菅  
小善、旁治兵學、余不及見之、其墓在北郊妙德寺、題曰樂郊兄  
先生墓、高芙蓉之隸也、……

安道は、篠崎三島の字、子琴は、葛森庵の字なり。

### 永富獨嘯庵墓 (明和)

上の宮の藏鷲庵にあり。表に『處士獨嘯庵墓』と題し、裏には、撰文あり。次にこれを節略す。

永富鳳、字朝陽、號獨嘯庵、長門赤間關人……少壯周游四方……

……多藝多通……明和丙戌三月五日、客死于大阪、年三十五……

著有囊語五卷、漫遊雜記、吐方考……筑前龜井鑑處靜誌、浪華

篠應道書、

猶この外、微瘡口訣一卷あり。本邦製糖の率先者たり。

### 並木正三墓 (安永)

千日前の法善寺の墓所に、北向けて、立てられたり。『名物なにはの

ながめ』には、奇形の碑の一つに數へたるが、その据ゑるどころ、昔にかはれるにや、臺石も他のを借れるものゝ如し。碑の長さ二尺に足らず。方柱形にして、前後左右皆漢文を刻して、正三が一代の略歴を記せり。前面に、『南無三寶正三之墓』と刻し、破せしは、安永二癸巳二月十七日なりき。その文を摘録すれば、

並木正三、其父曰正作、雲州人、破産、提家移大阪……正三病

向死、大小劇子相集看病、惜不可救、當是日、劇長中村歌七告

之曰、亡之命矣、請覺焉、正三即嘆曰、南無三寶、南無三寶、

乃唱歌一首而終……死登見世不死遠作能花登見之爾身乃散果乃

何曾不似希流

笹瀬散人撰  
大手道人書

正三が狂言作者として、劇部にたてられたる事蹟は、小説史稿にも  
づりて、こゝには、いはず。

大畠黙翁墓 (安永)

生玉寺町玄徳寺にあり。題表の『黙翁大畠君之墓』も、碑文の撰書  
も、皆中井竹山が一筆になれり。裏面の文は、  
君諱一利、字貞卿、號梅塙、稱治部左衛門、大阪府人……學梁  
田蛻巖……蛻巖集中、十二仙詩、有梅塙春傳浪華香句、即弊  
君也……旁好茶禮俳諧、晚入禪、與諸名柄交、號默翁……安永

四年五月十四日歿、壽七十三……

河野恕齋墓 (安永)

下寺町光明寺墓地の東手、藪の側にあり。正面に『河野恕齋先生墓』  
と題し、裏に、藪孤山が長文を刻せり。恕齋諱は、子龍、字は伯潜、  
別に鶴皋、南瀬など號せり。岡白駒の長子にして、混沌詩社の巨擘  
たり。年三十七にして、安永八年二月九日に歿せり。傳の悉しさは  
先哲叢談續篇にあり。

葛子琴墓 (天明)

天満寺町栗東寺にあり。題して『本齋庵葛先生之墓』といふ。碑文に、  
……君諱張、子琴其字、号齋庵、橋本氏、葛城爲本姓、家世業

醫……考貞淳醫聞于府下、妣天野氏、君夙孤、爲父弟子確井逸翁所保鞠、少爲學、穎悟好賦詩……家在玉江上、樓名御風……子琴名藉藉著聞京攝、延及它州、諸箏來屬、求與之交、乃醫治亦傳稱云、天明甲辰五月七日卒、年四十六……集若干卷、藏于家、銘曰、性之攸發詩耶、質之美而才之奇、緊名弗淪、徵諸玄珉、

浪華

岡元鳳撰

篠應道書

子琴の歿年月、及び享年など、いづれの書にも定かならず、いたく感ひをりしが、大野泉石が鐵筆の道にて、深く子琴を崇びをれば、

夙くより、この墓を知りて、著者に語りさ。これによりて、詣で、碑文を寫すことを得つるのみならず、諸書の紛紜たる異説を判斷し得たり。

子琴が混沌詩社中に在いて、嶄然と頭角を露しつる事蹟は、おのれ別に詳傳を作りたれば、こゝにはもらしつ。

この墓を建てしは、子琴の外甥なる僧雪舫なりき。雪舫は、雪舟の筆意を學びて、畫を好し、世に名ありき。

澁井太室墓 (天明)

大島默翁の墓より、少し西にあり。碑面には『太室澁井先生之墓』と題表せり。撰文は、紀平洲なり。

是佐倉侯侍讀太室澁井先生諱孝德字子章之墓也。先生以天明七年丁未秋九月、從侯之爲大阪留守而西、明年戊申夏六月十四日、病卒于阪城官舎……得壽六十有九……所撰國史八十卷、二十五年五易稿成……

この他、建官考、扶桑名勝、讀書會意、雜圖、韓非子正誤等の著あり。

### 飯岡澹寧墓 (寛政)

墓は、小橋の龍淵寺にあり。名は孝欽、字は徳安、澹寧は、その別號なり。飯岡義齋をもて行はれたり。混沌詩社の盛なる頃、猶多く徒を聚めて、教授したるが、鬱として、醇儒の望みありき。寛政元

30 \*  
31 \*  
32 \*  
33 \*  
34 \*

年巳酉十一月八日に歿して、年七十三なりき。三女ありしが、長は夭し、二女は、頼春水に嫁して、山陽を生み、三女は、尾藤二洲の妻たり。墓銘は、春水の手に成れり。

### 片山北海墓 (寛政)

小橋東寺町(清堀村)梅松院本堂の西手にあり。表に「北海片先生墓」と題して、裏に、蕉中師が撰みし文を、篠崎三島が書けるを刻せり。北海名は猷、字は孝秩、越後新潟の人なり。大阪に來り、當時の才俊を集めて、混沌詩社の盟主たり。寛政二年九月二十二日、年六十八にしてみまかりき。くはしくは、先哲叢談續篇に在り。

### 金谷三石墓 (寛政)

西成郡木川村正通院（俗に木寺といふ）本堂裏手の枇杷の木の下にあり。題表は『興般居士之墓』、裏は、中村健の文、鼎元新の書なり。三石、名は興般、字は子般、通稱興右衛門といへり。大阪南部の市長となりて、世々天満金屋町（金谷氏に因みて、命じたる町名なり）に住めり。三石學深く書を好せり。常に沈南蘋に傾倒せしが、嘗て、長崎祇役のをりから、熊代繡江に就いて、沈氏の書法を授かり、花鳥に於て、最も意を得たり。寛政六年五月二十三日歿す。年六十三なりき。

入江長輔墓（寛政）

北海の墓と斜に相對せり。墓碑の外、別に墓誌銘あり。文は、頼春

水の撰にして、篠崎三島の書なり。長輔、諱を昌喜、別號を狻猊子幽遠窟、獅子童、俗稱を榎並屋半次郎といへり。浪華の一商家の隠居なり。俳諧の發句を善くし、歌學も凡ならざりき。昌喜の名は、しばし、蘆庵の六帖詠艸に見えたり。その著、幽遠隨筆の中に、半時庵淡々の説をどがめし兩三條ありしかば、淡々の門人に訴へられ、絶板になれり。猶著書中、竹取物語補註（竹取物語抄頭書とも）の原註は、混沌詩社に参りし養快小山儀が著したるなり。養快は、昌喜の從兄たり。寛政十二年八月十二日、享年七十九にして、身まかりき。（逸事などは、井上通泰子の物語に據れり。）その著書の目を舉れば、左の如し。

竹取物語補註	三卷	和田 津海	十二卷
青陽 唱詠	一卷	久保のすさび	十五卷
異名分類抄	四卷	榮華 採葉	二卷
葦 手 考	一卷	仁徳天皇傳	一卷
萬葉類葉抄	十六卷	本朝地名考	數卷

幽遠 隨筆 數卷

その碑銘を次に掲げん。

嗚呼津人稱多文 業緒有成就如君 賦性之厚亦能勤

吾欲鐫詞警津人 其書數種有遺芥 尚徵之梅松之墳

十 時 梅 厓 墓 (文化)

八丁日寺町正念寺にあり。もと梅の古木の切りたるまゝを皮はぎて、臺石の上にする。その表に、『梅厓十時先生之墓』と隸書にて、かきたるがありしが、今は朽ちはて、臺石のみ残り、生田南水が語れり。著者が用ひしときは、是かあらぬかと、いたく迷ひにき。梅厓名は賜、字は子羽、通稱は半藏、浪華の人にして、長島侯の文學となれり。その書畫の妙は、當時よりも、なか／＼に、今世にもてはやさる。文化元年正月二十三日、年五十六にして逝きけり。○今春(明治二十三年)浪華の畫人芳川笛村、これが傳をつくり、上梓して、同好に頒ち、且つ別に寺門に近き處に、石を建て、紀念の碑とし、追善をいとなみま。

中井竹山墓 (文化)

中井履軒墓 (文化)

發庵以下、父子叔侄同じく、誓願寺にあり。竹山の碑、以下皆題表のみにて、他は何も記する所なし。『竹山中井先生墓』名は積善、字は子慶、通稱は善太、晩に溧翁と號せり。文化元年二月五日、七十五歳にて歿しき。私諡を文惠といふ。『履軒中井先生墓』名は積徳、字は處叔、通稱は徳次、文化十四年二月十五日、八十六歳にて歿しき。竹山は、發庵の長子にして、履軒は、次子なり。竹山の二子、蕉園(名は曾弘、字は伯毅、父に先だち、享和三年、三十七歳にて歿しき)碩果(名は曾縮、字は子友、蕉園の弟、六十九歳にして、

天保十一年に歿しき)その他袖園、桐園等、皆連れり。

墨江武禪墓 (文化)

天満寺町妙福寺本堂の裏手三側目にありて、南向きなり。三層の臺石の上に安ゑられたる碑の形、前而は、六角柱の半分にして、後は、楕圓柱の半形なり。正面の題表は、行書にて、『墨江武禪墓』、左に「敬處」右に「舜女」とありて、裏には、『文化三年丙寅正月二十九日、春光院武禪信士』と記せり。猶左右に、他の兩人の法號歿年を刻したれど、此に、用なければ、わざと省きつ。武禪が事蹟は、畫乘要略に、月岡雪鼎に學びて、畫を善せしよしかけり。殊に春畫の名手なりとぞ。同書に、黒井とあるは、誤りなり。此墓、はじめは、



柏尾梅外にをしへられき。

奥田拙古墓 (文化)

一心寺中、來山の墓より、少しはなれて、南にあり。『拙古奥田府君墓』と題して、碑陰には、生前自誌の文を刻せり。側に、文化四年八月十二日、年七十九にして、終りしよしを添へ記せり。拙古、名は元繼、字は志季、拙古はその號にして、別に仙樓とも號せり。元は播州の人なるが、儒をもて、大阪に出で、當時に名ありしかば、そが撰びたる碑銘など、處々に少からず。

並木五瓶墓 (文化)

こゝに標目したる五文字を隸書にて、懸表したる四層臺の大碑は、

天王寺西門内なる竹垣のうちに在り。碑の右側に、辞世として、

泡雪やけふさまぐの夢のはて

どの一句を刻せり。斯人は、江戸にて、身死りしかば、深川靈岸寺内正覺院なる、

梅はさく我はちり行くさくらざや

の辞世を刻したる碑下こそ、眞に遺骸を埋めたる處なめれ。こゝのは、歿後に、門人故舊らが、相謀りて、建立せしものなるべし。

橋本稻彦墓 (文化)

蛇阪の梅舊院にあるべきに、無縁なればにや、墓は、何處とも定かならず。石さへ、それと覺しきもなし。唯證果簿にのみ、『文化六

年己巳六月十五日歿、滿江夏雪信士、橋本中臺事』との二十餘字を留めたるのみ。著者の探りしをりには、橋本左京墓、源稻彦男と刻せる自然石の、生垣の間に、砂まみれながら倒れたるを見出し、こそ、いともあはれなりしか。稻彦は、年少うして、鈴門名譽の人たり。夙くより、大阪に出で、門戸を張り、著書少からず。惜いかな、天これに年を假さず、僅かに、二十九歳にして、世を逝り、その著述は、校正新撰姓氏錄、紫文製錦、紫文消息、古今假名遣、辨讀國意考等は、余等の記憶に存せるが、猶この外に多くあるべし。此墓所にて、秋里の墓を、偶然に見當てたり。碑面に、行書もて、

秋里安藤先生墓

と刻せるのみにて、歿年は見ゆす。證果簿を檢せしに、稻彦のどうらうへにて、石はありながら、簿上に所載なし。

篠崎三島墓 (文化)

天満寺町天徳寺にありて、この一家のは、皆つらなれり。題表は『三島篠崎先生墓』碑文は、

昔余學於上國也、初到阪駐半年、獲交混沌社諸子、皆一時之傑就中、最嶽嶽磊落、露鋒穎者、爲三島翁、心竊異之、……翁學多通、如天文卜筮音切之類、就師討究、……又善書、……著有碧紗籠集七卷、草彙四卷、……文化十年癸酉十月晦歿、享年七十七、……肥前古賀撰、安藝頼惟完填諱並表、不肖弼謹書並建、

櫻は、精里、惟完は、春水、彌は、養子小竹なり。かく一時の名家を連署したる碑文は、多く見えず。盛といふべし。

齋部道足墓 (文化)

梅舊院の墓所、安藤秋里のより。少し東手にあたりて、道足の墓あり。斯人の詠草は、渡邊重兄の家に残れるを、わが友一柳芳風が心して、二三首寫し取り、我に贈れり。詠草は、浪華歌學史料にもとて、こゝには、載せず。さて題表は、隸書にて、

齋部宿禰道足墓

碑文は、

齋部道足翁止云波、陸奥會津人我、弱時由許禮乃難波爾來豆、

年麻禰久住流爾、常爾阿我利多代乃手振乎志奴比豆、所作歌母、

古風乎慕比、殊爾長歌乎好豆、其數八百餘作支利、如是、長歌乎多

久作流人波、古與伊麻太聞受、世爾例無支歌作爾有計流、惜加、

悲母、齡六十止云爾、一不足志、今年文化乃十三年止云年乃八月

爾奈、暴病乎爲豆身死流奴……其子千春我吾爾詔豆、令作多其辭、

吾止翁我好支友奈關深利、

森 狙 仙 墓 (文政)

森 周 峯 墓 (文政)

西福寺内なる宗因の相對せり。周狙兄弟二碑とも、高さ二尺あまりの極めて粗末なる石にて、標目の如く題表せるのみ、忌日は刻せ

ざりけり。過去帳には、狙文政四年七月二十一日七十五歳、周文政六年六月二十二日八十七歳と見ゆ。狙の義子徹山（天保十二年五月六日歿）徹山の後を承けたる一鳳（明治四年十一月二十二日歿）は碑なくして、位牌ばかり存せり。周狙の二碑は、一鳳が建立せしなり。狙仙、徹山、一鳳等が丹青に於ける伎倆は、世に知られたるが周峯の事は、いさゝか、篠崎小竹が標記したる増補在津紀事附録（頼春水の原著）に在り。

一本亭魚鱗墓（文政）

清水阪の下に、貞柳の墓碁と相並べり。こは、當時名だゝる狂歌師なりしが、文政七年十二月二十五日に身まかりき。題表は、上記の

如くにて、側に辭世の一首を添刻せり。

何ひとつ我が物もなきかりの世に

かたみをのこしかくは言の葉

尾崎雅嘉墓（文政）

くちなは阪の春陽軒に在り。無縁なれば、倒されて、藪のふちに積まれたる碑を著者等が見出して、住持に心付けし後、書林鹿出松雲がその先世との因みによりて、碑を修め、資を投じて、これを墓所の口の樑の茂れる下に移せり。蘿月が文學上の功績は、今更喋々を要せず。題表及び文は、左の如し。

蘿月尾崎君墓

姓尾崎、名雅嘉、字有魚、後有所避、以字爲名、稱俊藏、蘿月其號、文政丁亥十月三日歿、享年七十三、葬春陽軒、法謚曰清宵院石叟蘿月居士、

衣川長秋墓 (文政)

圓珠庵なる契沖阿奢梨の墓の傍に在り。題表碑文、左の如し。

衣川長秋奥墓

衣川宰記主波、伊勢國壹志郡須川里池田某乃子也、所由有而衣川乃家乎嗣留奈利、本生池田氏波、吾本居族也、……寛政三年、鈴屋翁爾從……伯耆國乃古學乎開支、……雅名瓊齋、……文政五年二月十日浪華……門人中島豊足乃寓爾身死……

年五十八……本居大平、

春田横塘墓 (文政)

春田古處墓 (明治)

二墓ともに、口繩阪の淨春寺内にあり。春田氏、横塘古處父子兩世儒を業とし、浪華の名家たり。二碑とも、隸書にて題表せるのみにて、碑文なし。その忌辰横塘は、文政十一年戊子八月九日、古處は、

明治十二年八月十七日(行年七十四)なりき。

三井棗州墓 (天保)

同じく淨春寺にあり。棗州三井先生墓と隸書にて、題表し、碑陰に文を刻せり。これを讀みて、斯人の一代を知るに足らん。

先生諱善之、字文卿、棗州其號、三井氏、累世以眼醫著、而先生和易恭遜、加以文雅才藝、與弟可亭、墳笮相和、人無不羨稱、以天保四年癸巳重三日終、壽六十八、妻大熊氏生元之、嗚呼、先生混沌遺老、吾敬其人、銘其墓表、

篠崎 弼 撰并書

哀子 元之 謹立

金谷興詩墓 (天保)

西成郡木寺の墓地に在りて、父興股のと並べり。表は「金谷興詩之墓」、裏は、中井碩果の撰びし文を刻せり。興詩字は立禮、號は遷齋、又、夢野、通稱與右衛門といひて、父につぎて大阪南部の市長た

り。天保六年六月十四日、六十二にして歿しき。少うして、學を好み、漢學を中村韋庵に受け、和歌をば、伴蒿蹊に學びて、名譽の門人たり。その性行の謹嚴なりしにも似ず、磊落なる蜀山人六樹園と相親しく、書牘の往復、常に絶ゆるざりしよし。金谷氏に残れる遺草に、

春の夜のやみにも鴈はゆくものを

人は道をやふみたがふべき

一讀して、この人の平素を想見すべし。

田能村竹田墓 (天保)

口細阪淨春寺の古松の下に、儼然と巨碑の立てるぞ、漢隸にて題し

たる「竹田先生墓」なりける。墓石は、三層なり。竹田、名は孝憲、字は君彝、通稱は行藏、世々豊後の直入郡竹田村に居るによりて、竹田莊と號せり。猶花竹幽窓主人、九重仙史、隨緣居士、雪月書堂、田舎兒、補拙廬等の別號ありき。竹田が學に詩文に丹青に、絶詣なることは、あまねく知れわたりたれば、爰には、いはす。天保六年五月、大阪に來り、六月吹田村の井内氏に寓して、疾を獲て歸り、中の島藩邸にて、療養しつるが、八月二十九日、終に起たざりき。行年五十九。是より先、竹田が浪華に寓せしこと、五回に及び、寓するは、多く生國魂の持明院なりしが、つひには、此地の土になれり。著書目を擧ぐれば、

- 豊後國誌 填詞圖譜 游府内百活矣
- 陶寫小語 暫游日記 屠赤瑣瑣錄
- 師友畫錄 竹田莊詩話 黃筍記行
- 隨緣沙彌語錄 今才調集 泡茶新書
- 山中人饒舌

村田春門墓 (天保)

茶臼山の南なる邦福禪寺(雲水庵)門内の西側にあり。表は、掲題の如くにて、側面には「天保七丙申年霜月二十四日終七十二歳、平嘉言建」と刻せり。嘉言は、春門の義子にして、家學を嗣ぎ、傍畫を善せり。嘉永二年六月五日に長逝し、その墓は、父のと共に並べ

り。春門は、鈴門名譽一人たりしに、その末葉は、道頓堀邊にて、いとほかなき業いとなめりと住僧より聞けり。なぐての名家、その後裔は、かゝる類多し。

中村芝翫墓 (天保)

西高津正法寺の門内南側にあり。表には、

歌唄院宗讚日徳信士

裏には、

中村歌右衛門、諱宗讚、綽號芝翫、……父歌七加賀人……

右には

天保九年戊戌七月二十五日歿

左には、

辭世

南無さらば妙法蓮華

けふかざり 梅玉

石津亮澄墓 (天保)

この墓及び瓊齋のは、先年秋渚が露伴好尚の二子と共に、圓珠庵の契沖阿闍梨の墓にまうで、たま／＼その傍にて、見出でしなり。米居が初學の爲に、書を著して、これを導きしこと、いと多かり。題表及び碑文は左の如し。

富草屋石津君墓

君姓石津、名亮澄、字并輔、富草屋其號、又號米居、君姓嗜和



歌、初從蘿月尾崎氏游焉、後事藤垣内本居翁、學既成矣、就之者多云、安永八年己亥十月十三日癸亥、生於曾根崎、天保十一年庚子二月九日、歿於浪華、年六拾貳、

小島 彤山 墓 (弘化)

中寺町禪林寺内なる見宜堂のと相對せり。表には、掲題の如く記し、裏には、文を刻みたり。その生前彫刻に巧みなりしことは、頼山陽が記文に詳かなり。彤山名は彪、字は子産、丹後峯山の人なり。弘化二年七月十六日歿し。享年五十二。

齋 藤 變江 墓 (嘉永)

濱村の三味の西手にあり。『變江齋藤先生墓』と題表して、陰に、野

田笛浦の撰びし文を刻せり。變江名は象、字は世教、通稱は五郎、阿波の商人藤右衛門の男なり。大阪の北濱五丁目に來住して、徒を聚めて、授け居たり。嘉永元年八月十三日に歿し。享年六十四。その著書にて、その學殖を知るべし。

變江毎に、百卷の書を著し、五郎入道正宗の刀を獲ば、吾事足らん、といひしが、竟にその言の如くなりき。

- 四書 叙旨 十六卷
- 五經 志疑 四十卷
- 左傳 說 五卷
- 國語 評 六卷
- 史記 文評 十五卷
- 莊子 文評 二卷
- 八大家文法 四卷
- 唐詩 發揮 四卷

歌、初從蘿月尾崎氏游焉、後事藤垣内本居翁、學既成矣、就之者多云、安永八年己亥十月十三日癸亥、生於曾根崎、天保十一年庚子二月九日、歿於浪華、年六拾貳、

小島 彤山 墓 (弘化)

中寺町禪林寺内なる見宜堂のと相對せり。表には、掲題の如く記し、裏には、文を刻みたり。その生前彫刻に巧みなりしことは、頼山陽が記文に詳かなり。彤山名は彪、字は子産、丹後峯山の人なり。弘化二年七月十六日歿しき。享年五十二。

齋 藤 鑾 江 墓 (嘉永)

濱村の三味の西手にあり。『鑾江齋藤先生墓』と題表して、陰に、野

田笛浦の撰びし文を刻せり。鑾江名は象、字は世教、通稱は五郎、阿波の商人藤右衛門の男なり。大阪の北濱五丁目に来住して、徒を聚めて、授け居たり。嘉永元年八月十三日に歿しき。享年六十四。その著書にて、その學殖を知るべし。

鑾江毎に、百卷の書を著し、五郎入道正宗の刀を獲ば、吾事足らん、といひしが、竟にその言の如くなりき。

四書叙旨	十六卷	五經志疑	四十卷
左傳說	五卷	國語評	六卷
史記文評	十五卷	莊子文評	二卷
八大家文法	四卷	唐詩發揮	四卷

明清六家文法 六卷 歸欽錄 二卷

文集 十卷

篠崎小竹墓 (嘉永)

天満寺町天徳寺内先塋の次に在り。碑のあらまし左の如し。

小竹篠崎先生之墓

……嘉永四年五月八日歿、年七十一、……彌字承彌、小竹及畏堂其號、……豊後人加藤吉翁仲子、三島翁收爲子、……肖像自題曰、貞不絶俗郭林宗、和而不流柳下惠、不爲郷愿不爲甚、欲以平常了百歳、及歿、門人採摘其語、私謚曰貞和先生、……伊勢齋藤謙撰、丹後野田逸題表、門人吳策書、孝子槩建、

篠崎竹陰墓 (安政)

義父小竹の碑と相距ること、遠からず。碑は、自然石なること、文中にいへる所の如し。題して、『竹陰篠崎先生墓』といふ。碑陰には、

先生諱槩、字公槩、俗稱長平、江戸人、來阪嗣篠崎氏、安政戊午八月病歿、其雅言曰、我生前無可碑、若碑則用自然石、勸竹陰居士墓、可矣、

奥野小山墓 (安政)

西天満寺町圓通院あり。題表して、『小山奥野先生墓』といふ。裏に文あり。

先生諱純、字温夫、稱彌太郎、小山其號、奥野其姓、大阪人、

爲參政遠藤侯記室、安政五年戊午八月二十日歿、享年五十九、

所著小山堂文抄若干卷、行于世、辱知生吳策書、

小山は、篠門の巨擘にして、學門文章、關西に名ありしに、碑銘に  
吳北渚を勞せしは、解すべからず。當時、同門の名士、猶在世せる  
は、北渚のみならずりしに。

黒澤翁滿墓 (安政)

口繩阪の珊瑚寺にあり。方柱形の花崗石もて、積みあげたる立派な  
る碑なり。ふつてり肥れて総髪すがたなるお武家の翁滿うしは、碑  
の形見てもぞ、想ひやらるゝ。碑の周圍、杉葉茂りて、面に掲題の  
如く刻せる外三面は、見るべからず。著者蜘蛛のいをわけ、杉葉の

あはひに首さし入れて、僅かに、『安政六己未歲四月二十九日歿、年  
六十有五、門人中川元瑞撰並書』と右側なる『誠忠院圓應翁滿居士  
』とのみ讀まれたり。

二東生稊墓 (安政)

天滿寺町九品寺本堂の西手にあり。題表は『生稊二東先生墓』とあ  
りて、撰文は、藤澤東咳なり。生稊諱は正榮、字は士仁、通稱は大  
藏、別號は乾々齋、筑前粕屋郡内橋村の人にして、家世々眼科醫を  
業とせしが、斯人に到りて、江上茶洲に従ひ、護園の學をなせり。  
天保九年、大阪城の醫となり、安政七年二月二十九日、南新町の僑  
居に歿しき。行年五十九。

三浦道齋墓 (萬延)

谷町寺町大仙寺にあり。是も同じく東咳の撰文なり。道齋諱は茂樹、相州鎌倉の人なりき。文のはじめに、

先生住于浪華、四十餘年矣、人或稱曰國學家、又稱曰韻學家、

曰參禪家、曰書法家、而本業在醫……

とかけるを見れば、その多通なるを知るに足れり。萬延元年六月八日に歿して、行年八十二なりき。著書は、韻學楷梯、補正字林玉篇、標註磨光韻鏡など名高し。韻學一得は、未だ脱稿に至らずしてみせかりき。

阪本鼎齋墓 (萬延)

中寺町大倫寺にあり。『阪本俊貞之墓』といふ外に、『剛毅君之碑銘』と刻せる石あり。並河樺翁の文なり。俊貞字は叔幹、通稱は鉉之助、大盤の亂に、淡路町の紙屋の屋上より銃を放ちて、賊徒を逐ひ散したる有名の士なりき。萬延元年九月二十四日、七十歳にして、長逝せり。

三瓶信庵墓 (文久)

谷町寺町重願寺にあり。題表は、後藤松陰の筆なり、と信庵の門人なる瀧山三愛はいひき。信庵名は魁、字は守巳、通稱は鋳藏信州高遠の藩士三瓶清左衛門の三男なり。若うして、市河米庵に就て、書法を授かり、業成りて、大阪に來り、高麗橋五丁目に住みて、教

授し、門人多かりき。文久二年八月七日、歿し。義子浩齋養家、家を嗣げり。

### 熊谷直好墓 (文久)

山小橋の西念寺本堂の北手なる生垣ゆひめぐらしたる中にありて、少し傾けり。表に『熊谷直好翁之墓』と題せるのみにて、他の文字見ゆず。本堂に安置せる日牌には、

文久二年壬戌八月八日  
不識庵香一居士

裏面には、『稱平野甚助』との五字を彫り。桂園の名家も、無縁とありては、あはれに、香火冷かなり。

### 鼎金城墓 (文久)

福島の妙徳寺(五百羅漢)内の南手墓處あり。自然石の表に、隸書にて、『鼎金城先生墓』と刻し、裏には、橋本香坡が撰書せし文をるりたり。金城名は鉉、字は子玉、春嶽の男、浪華の人なり。文久三年五月晦、年五十三にして歿せり。金城の少なりしとき、岡田半江その書を見て、『鼎氏有子、春嶽可瞑』といひしことは、碑文に見ゆこの一語にて、金城を知るべし。その小傳は、日柳三舟翁の侯鯖詩語にあり。

### 廣瀬旭莊墓 (文久)

茶臼山の雲水庵なる墓所の西北隅に在り。隸書にて、『旭莊廣瀬先生

墓』と表にありて、裏には、『文久三癸亥年八月十七日卒、歳五十有七』と刻せり。相莊名は謙、字は吉甫、通稱は謙吉、一號は梅墩、豊後日田の人なり。詩壇の大家なれば、絮説するを要せず。その傍に、圓柱形なる藤井藍田の碑もあり。題して、

藍田居士墓

といへり。門人なれば、先生の墓側に葬りしならん。こは、元治の役、國事に周旋せし浪華の賈人藤井徳なり。

萩原廣道墓 (文久)

西成郡 浦江村妙壽寺の杜若池の傍にあり。碑の高さ臺石とも、凡そ四尺許にして、面には、『萩原廣道之墓』と記し、裏には、

文化十二年乙亥二月十九日生

文久三年癸亥十二月三日卒

この墓は、葭沼が歿後、門人故舊等、相謀りて、建立せしなり。

後藤松陰墓 (元治)

天満寺町天徳寺に在りて、篠崎一家のと連れり。『松陰後藤先生墓』と題表して、裏に、『元治紀元甲子十月十九日歿』と刻せり。松陰は、頼門の高足、篠家の好婿にして、久しく浪華に門戸を張りしことは、皆人の記憶に存せる所なれば、後詳しくは贅せず。養子箕山桐坪二人のも並べり。

藤澤東咳墓 (元治)

生國魂寺町齡延寺にあり。題表は「東咳藤澤先生墓」とありて、裏に刻せるは、門人中谷輝の文なり。東咳名は甫、字は元發、別號は守泊園、讚岐の人なり。元治元年十二月十六日、瓦町の寓に歿し、年七十二。令嗣南岳家學を承けて、門戸を盛にし、淡路町に住めり。塾名舊に依りて、泊園書院といふ。

僧物外墓 (慶應)

中寺町禪林寺本堂の北手にあり。自然石の表に、「物外不遷之墓」と題し、裏に、「慶應三歲次丁卯冬十一月二十五日寂」と刻せり。物外は、即ち拳骨和尚なり。

今泉芝軒墓 (明治)

天満寺町天徳寺にあり。自然石の表に、「今泉芝軒先生墓」と刻せるのみにて、他の文字はなし。芝軒名は麟、字は聖祥、通稱は麟藏、別號は立志齋、豊後佐伯の人なり。學問文章、世に定論あり。文久元年、大阪に來り、帷を下して、教授し、門人いと多かりき。明治六年一月三十一日に、三十九年を一期として、空しうなりにき。もと碑は、なかりしを、村田海石は舊好あれば、密に自ら資を抛ちて、一碑を建立せるなり。

岸田素屋墓 (明治)

天満寺町尊念寺墓地の西手に在り。碑面に父母の法號を合刻せる中、「眞譽淨定素屋居士」と見ゆたり。明治十一年十月二十一日、年六



十六にして、歿しき。大阪にて、正風俳諧に於ける近來の大家なりき。

並河樺翁墓 (明治)

八丁目寺町誓願寺なる中井一家のどのならべり。頤の外、碑面に記せる所なし。八十四歳の高齡を以て、明治十二年二月六日に歿せり。中井家の姻戚なれば、これについて懷徳書院の教授たりき。

高見照陽墓 (明治)

福島ふくしまの妙徳寺めうとくじにあり。題表たいへうの外、碑陰ひいんに『明治十三年七月二十九日歿』と刻せり。照陽せうやう名は岱たい、字は子喬あきよしけう、別號は廬門いもん、伊賀上野いがうのの人なりき。學がくを小谷巢松こたにさうしゅう、中内樸堂なかつちやくどうに、書法しよはふを貫名海屋ぬきなうみやうに承けて、遂

に一家を成し、大阪に來りて、塾を開けり。

魚住荆石碑 (明治)

これも、照陽せうやうの墓はぶと同寺どうじにて、金城きんじやうのと並べり。自然石じねんせきの表おもてに、『荆石先生之碑』と篆額てんがくしたるは、長三洲ちやうさんしゅう、撰文せんぶんは藤澤南岳ふぢざなんがく、書しよは瀧醉たきさい月つきなり。荆石けいせき名は毅き、字は葭蒲あやなふ、別號は鷗波おうは、聽山ちやうざんなどあり。越後えちごの人。明治十三年八月六日、八十二歳にて歿しき。

阪本葵園墓 (明治)

小橋寺町梅松院こはせでらまぢばいしやうあんの墓所はうしよ入江長輔いりやえちやうほの碑後ひごにあり。『葵園坂本先生墓』と題し、文ぶんの撰書せんしよは、藤澤南岳ふぢざなんがくなり。葵園きまんは明治十四年十二月十九日、年五十五にして歿しき。名は亮りやう、字は亮平りやうへい、別號べつがうを白蓮居士ひやくれんこしとい

へり。淡路の人。明治年代の浪華における詩壇の老將なりき。

### 河竹能進碑 (明治)

雲水庵にあり。大なる自然石にして、表面に刻せる所は、掲題の如し。能進は、河竹黙阿彌の高足なりしが、業成りて一家をなし、明治三年、俳優大谷友右衛門に従ひて、此地に來り、始めて、櫻田雪誠忠美談を作りしに、人氣好かりしかば、是より續々新作狂言を出せり。大阪の演劇は、從來古人の作のみなりしか、能進の來りしより、新らしき仕組を見るに至れり。明治十九年十月二十六日、年六十六にして、世を逝りき。嗣子竹柴諺藏箕裘を繼げり。

明治三十三年三月二日印刷  
 明治三十三年三月八日發行

編輯者 磯野秋渚

大阪市南區安堂寺橋通  
 四丁目二百卅四番屋敷

發行兼 印刷者 繁本良之助

大阪市北區衣笠町二番屋敷

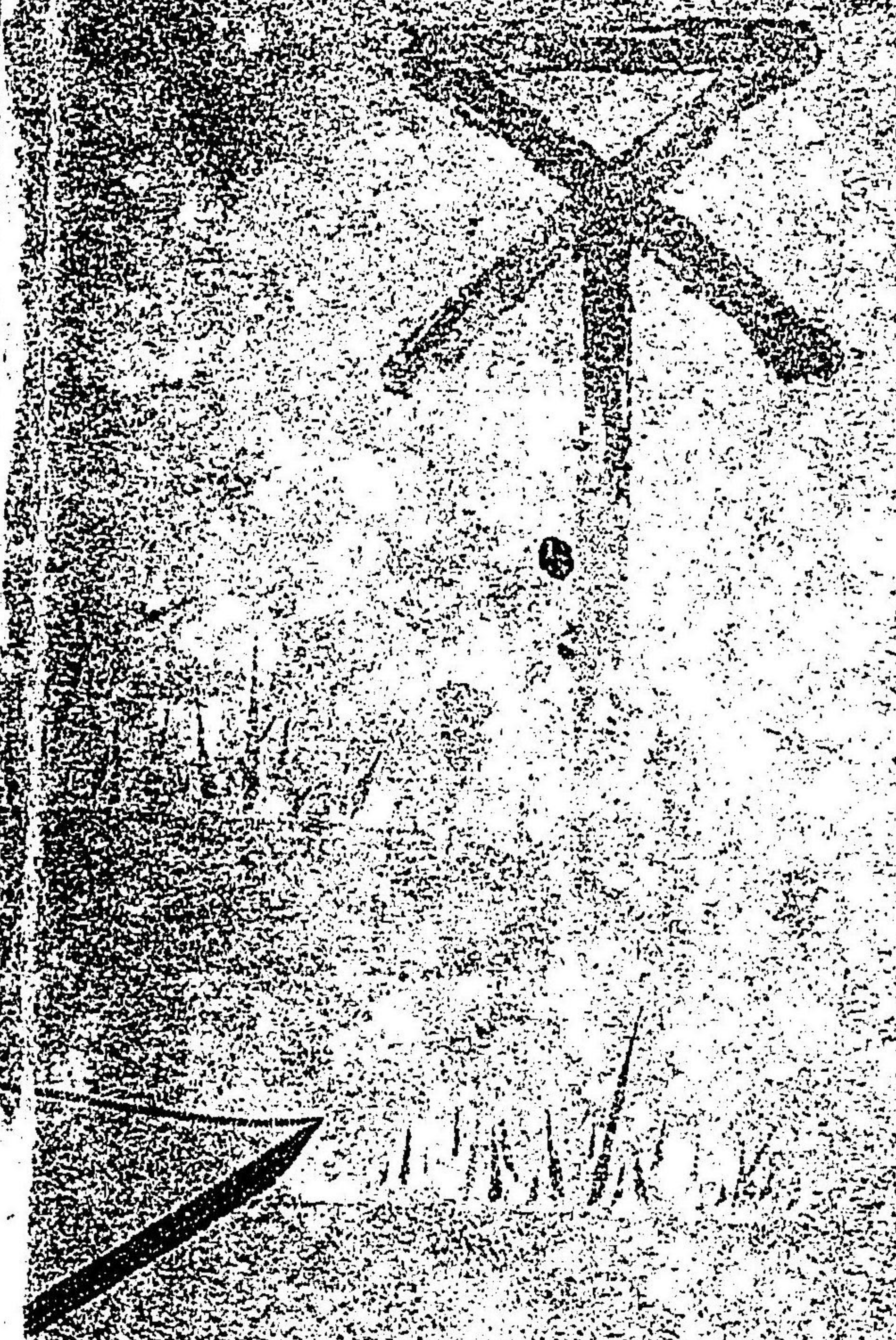
印刷所 河内谷印刷所

著作權 所有

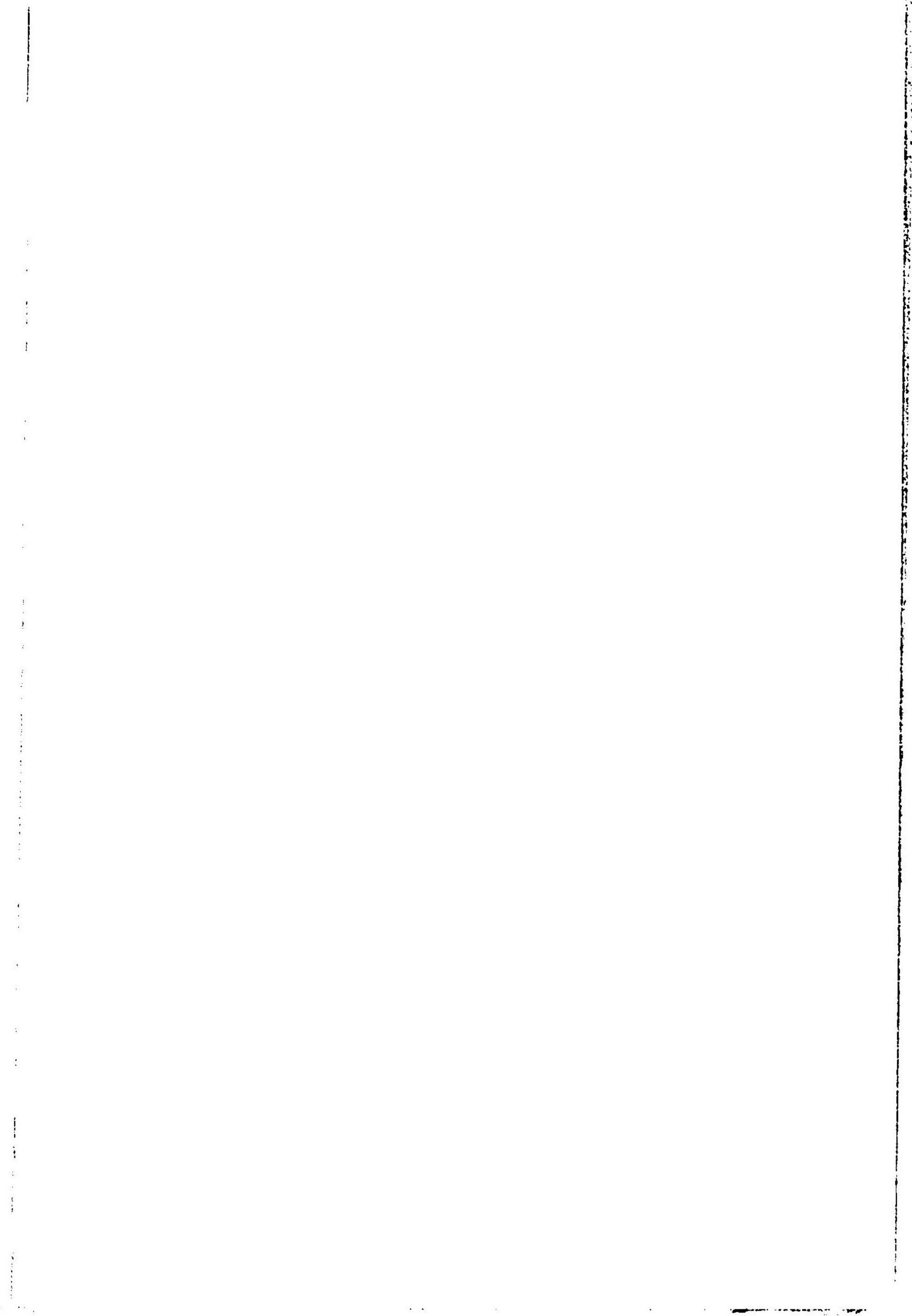
29
128

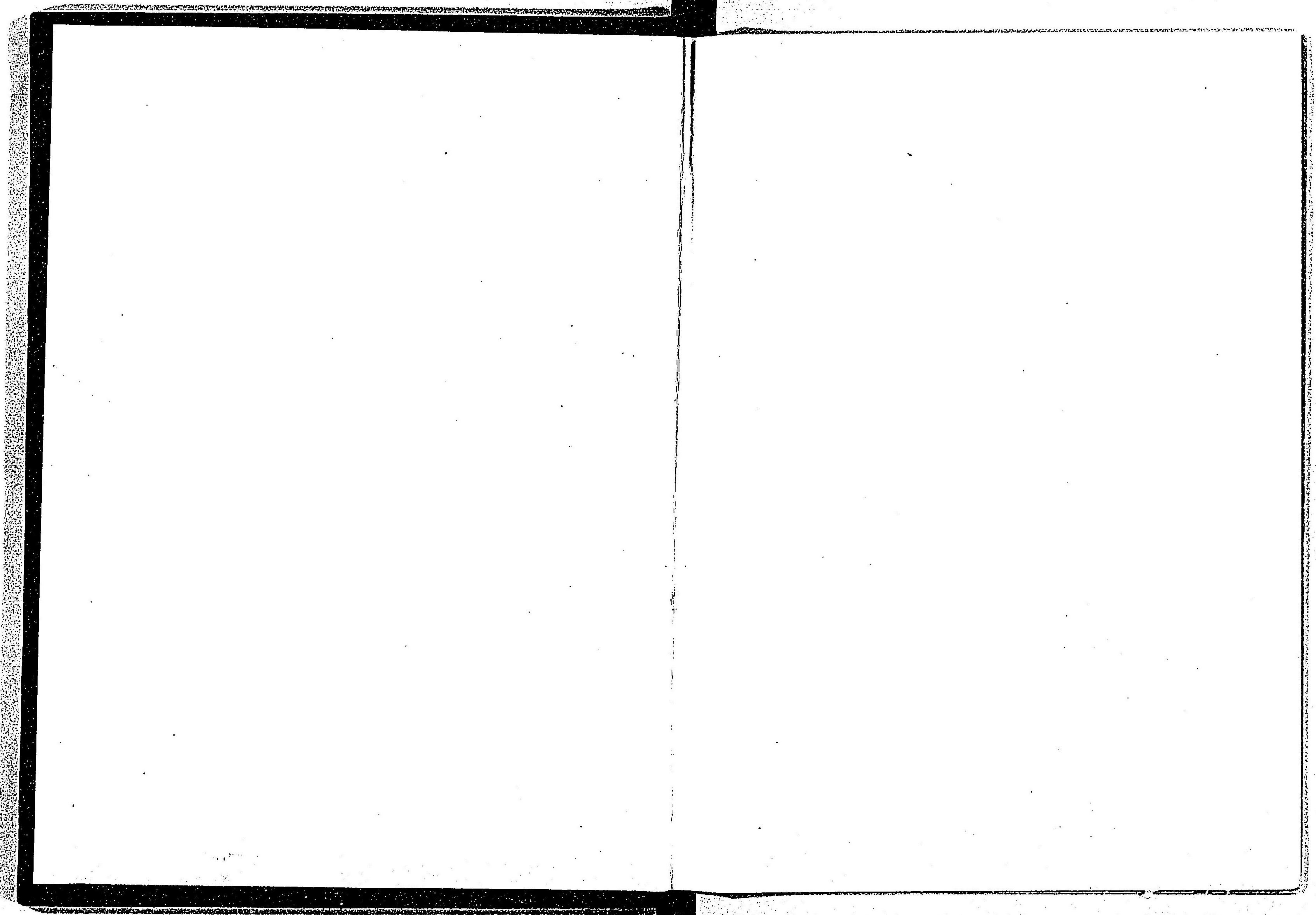
24/4/34

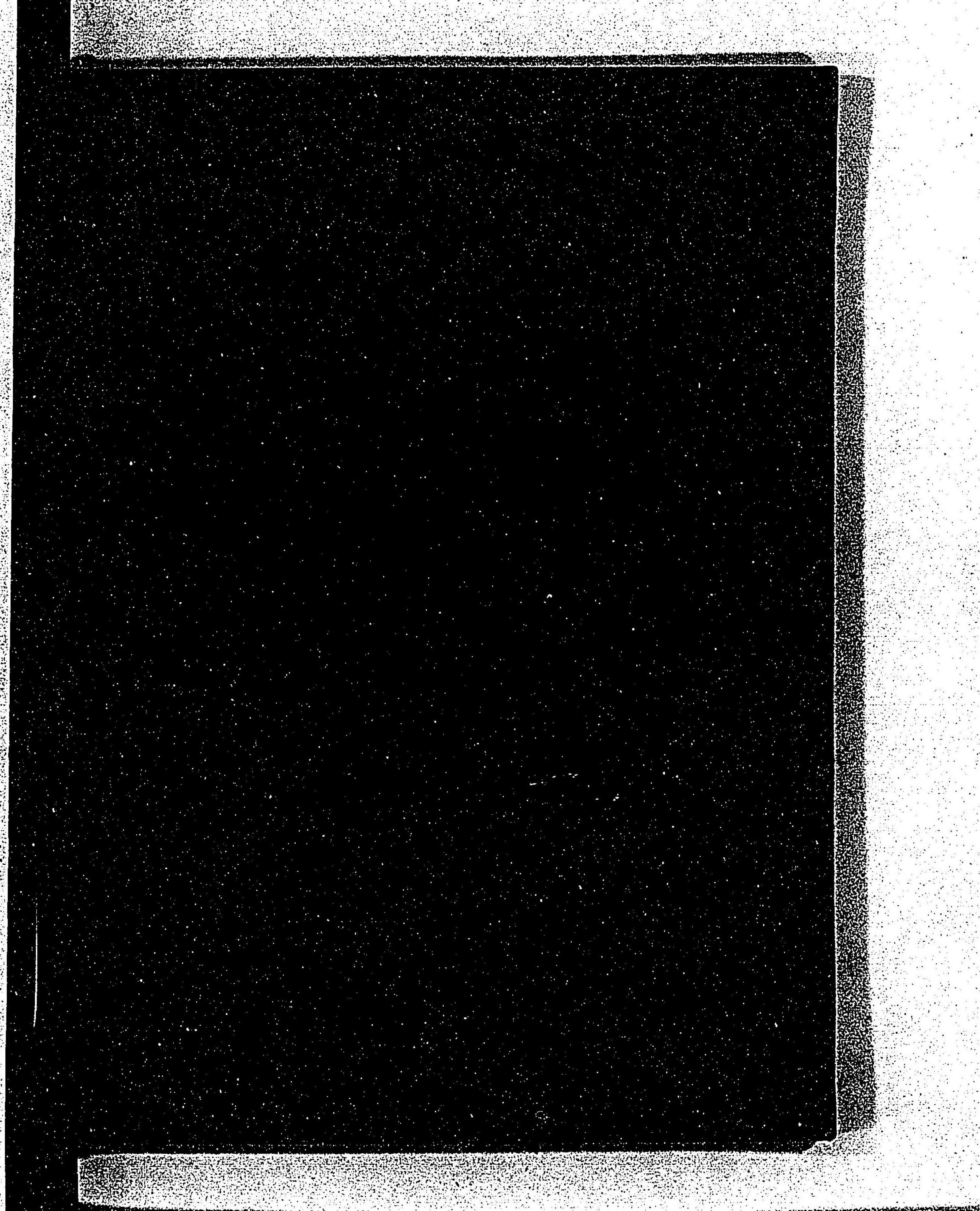
ZL8J0



朱善發







29

128

096204-000-2

29-128

なには草

磯野 秋渚/著

M33

DBR-0482

